
優しい少女と小さな翼

真田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい少女と小さな翼

【Nコード】

N2963T

【作者名】

真田

【あらすじ】

孤独だけど心優しい少女…シズナは仕事の一環としてレリクスの調査に参加する。そんな未開の地でシズナは小さな翼をもつ少女…エミリアと出会う。

シズナはこの女の子を見捨てられるほど薄情にはなれなかった。それだけで、たったそれだけでシズナの人生は大きく左右される…

そんな感じのファンタシースターポータブル2の二次小説。シリアスもあるけど笑いも……。あったらいいなあ…。そんな感じの小説！始

ま
り
ま
す

プロローグ（前書き）

勢いでやっちゃったなあ。

シズナ「そうだね。」

け、けどまあたいした問題ではないはずだ。二つ目だから少し更新が遅れるぐらい。

シズナ「けっして、小さくはないと思うよ?。」

ま、そんなことはおいといて。不定期更新になるとは思いますが、これからしばらくこの小説を読んでもくれると嬉しいです。

シズナ「流された…まあいいや。そんなわけで優しい少女と小さな翼。始まり始まり。」

始まりまーす。

プロローグ

いつも一人だった。

味方は誰もいなくて、両親すらも味方になってくれない。

それなりに大きくなったら捨てられて、そこでとある人に拾われて初めて人を温かいと思えた。

でも、その人もいなくなつて。また一人になつて。いろいろな場所を旅した。

いろんな人に出会つた。仲良くしてくれた人もいた。でも旅をしていたしすぐに別れた。

だからかいつも胸の中には重苦しい嫌な感じがこびりついていた。その感情の正体はいまいちよくわからない。

でも、それには慣れたと思ひ込むことにした。

でも、ある日、変わった子に出会った。

危なっかしいけど、いつも明るくて、元気な印象がある子供。

いい意味でも、悪い意味でも、子供。一応同年なはずだけどね。

そんな、女の子を見てたら、いつの間にか重苦しい嫌な感じは消えてた。そこでその感情の正体に気づくんだ。

私はきつと……

きつと……

第一話 レリクスで出会う場違いな少女。まあ、私もそう見えるけどさ。

一人の場にそぐわない少女がいた。

ここは最近新たに発見されたレリクス。その調査のために各地から実力のある傭兵が集められていた。

しかし、さっき言ったとおりその少女は傭兵らしくなかった。

白い膝小僧ぐらいの丈があるワンピースにサンダル。これだけでも全然それっぽくないのに華奢な白い腕にかわいらしい顔立ち。真っ白な長い髪。右目に眼帯をしていた。この特徴はのちに現れる「デューマン」と呼ばれる種族と同じだったがそれは他人はおろか本人も知らないこと。

これらの特徴を総合的にみて…え？傭兵？いやいや冗談でしょ……え？本当なの？みたいなものである。

しかもその少女は出口が閉まりかけ我先にと傭兵たちが逃げ出しているのに幸せそうに熟睡中。皆慌てていて逃げようとせず睡眠中の少女の存在には気づかなかった。

というか、これだけうるさいのに寝ていられるってすごいね。周りには怒声で満ち溢れていて、とても寝られる状況ではない。

…まあいつもの事でもあるが。

「起きろ！起きなさいって…！」

「う……うるさいよ…。」

ものすごい大声が耳元で聞こえ、ようやく目を覚ます。しかし出口はとつくに閉まっており時すでに遅しという表現がピッタリだ。まあそんなことはつゆしらず。眠気眼でゴシゴシと目をこすりながら

少女はボーッとしている。

「あれ…？あなた一人？」

目の前には少女の鼓膜を貫かんとする大声を出した金髪の少女がしかめっ面で立っていた。

「やつとおきたあ…何回いつても起きないんだもん…。」
「ええと…？」

と何が何だかわからない少女が頭に？マークを浮かべるが、金髪少女はそんなことには一切気づかない。そしていきなりため息をつかれた少女は何が何だかわからない。

「ハア…というか、あんたが起きても状況は変わらないのよね。」
「えと…なにがあつたの？」
「あ、そっか。あんた寝てたんだもんね。といつても私もよくわからないんだけど…」

とはいつても説明できることなんて、いきなりレリクスが起動して出口が閉まってしまふ。そして不幸なことに自分たちだけが閉じ込められてしまったという非常に短い説明。だが、その状況を認識するとさすがに寝ぼけたままではいなく、意識ははつきりしてくる。

「ふーん。…そういえば私まだ名乗ってなかったっけ。私はシズナね。」

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。あたしはエミリア、エミリアパーシバル。」

「そう。それじゃあ私はいくけど…エミリアはどうする？」

「ええ！？い、いくつて…え、ちよっと！どこ行くの！？…まさか

奥に進むとか言わないよね…。」

さすがにここで一人にするわけにもいかないよなあ…という思いを込めて少女…シズナはさっさと立ち上がる。立ち上がるだけのこの動きに一切の無駄はなく見るものが見れば相当な実力者だと悟るはず。…だけどいるのはエミリアだけであり、そのことに気づける人は誰もいない。

「そのつもり。出れないんでしょ。」

「だからと言って進まなくてもいいじゃない！ここで助けをまとうよ！」

「あー…えつとね…。」

どうせここも原生生物来るから危険だし、そもそも、雇った傭兵の命をいちいち気にするクライアントもあまりいないからいつ助けが来るかわからないし…だったら出口を探したほうが早い気がする。ということはどうやって納得させようか悩むものの……。奥に進むふりをすれば勝手に付いてきそうだなと思いつき、置いていく振りをする。

「じゃあ、別についてこなくてもいいよ…じゃあね。」

「あ、ちよっ！おいて行かないでよ！私も、私も行くからあ…。」

「なんか…ごめん。」

狙いはぴたりとあたった。しかしエミリアの声が後半微妙に涙声になり、罪悪感という精神的ダメージを食らうという結果が残ってしまいちよつと落ち込んだ。

「シズナって強いんだね…。」

「そう？普通じゃない？」

そういいながら愛用の武器である蒼い輝きを放つ刀身を持つ鎌【エレクション】についた血糊をふき取りながら答える。…彼女は強かった。エミリア視点で言うところであ、原生生物がわんさかいる…と言っている頃には間合いに侵入していつの間に取り出した、身の丈はある大きな鎌を一体目に振り下ろすところだった。そしてその光景にぼーっとしてたらいの間にサメみたいな四体の原生生物…エビルシャークはすべて真つ二つになっていた。

「普通じゃないって…でもまあ安心したよ。シズナと居ればここから出れそうだしさ。というか、あのおっさんと言ったら、もうSEEDはいないから安全だーとか言ってたくせにさー。そりゃあ今までレリクスはSEED襲撃の時にになるとその姿を現してはいたわよでも全部が全部そうだったとは…」

とエミリアの長い話を最初のうちは律儀に聞いてはいたものの、おっさんなる人物への愚痴からレリクスについての難しそうな話にシフトしたらたりから訳が分からなくなってきた。十二歳の時から六年間ずっと傭兵暮らしで、勉強の代わりに人や原生生物を切つて過ごしていたシズナだ。勉強するどころではなかったため、おそらく三角形の面積の公式すら答えられないであろう。そんな頭では間違いないく処理落ちしてしまう。というか現在進行形でしている。しかし別に三角形の面積なんて答えられなくても生きられるから問題ない。実際シズナはそうやって生きてきているし、日常で生きていくために必要な知識は持っているから問題はない。

「ええとー… エミリアー… その、頭が痛くなってきたから…」

その控えめな声にエミリアははっとしたようにシズナに向き直る。

「あ……ええと……その……こ、これぐらい常識だよな常識!!」

「そうだったの？、すごいね。私は知らなかったよ。」

「そ、そうだよ。常識。常識なの！シズナもちゃんと覚えなよ！！」

「あー……いや……遠慮しとく……」

そんな雑談をしながらどんどん先に進む。途中に出てきた原生生物もエミリアが見つけたとおもったらすでに隣にシズナはいない。いなくなっていることに気づいたときにはエレクシオンについた血糊をふき取りながら戻ってきている。はやすぎる。

そんな感じで原生生物を虐殺しながら楽々進み、ずいぶん奥にまで来たところでエミリアが端っこに立っている大きな人型の機械のようなものに気づく。

「ねえ、あれつて…。」

「自立型起動兵器ってやつじゃない？ たぶんまだ動く。ええと…名前はどう？」

[illegible]

大量の機械人形を前にしていきなり大声を出したエミリアに、シズナはきよんとする。そうして名前を読もうとしていたシズナが振り向きながら聞いていた。

「どうしたの？　いそがしいよ。」

「え、だっだって…う、動くって…」

「作つたの旧文明人だからね。数百年ぐらいで壊れるような軟なの」

は作らないよ。名前はスヴァルティアだつてさ。」

「そ、そんなことより、それじゃあ早くいこうよ！動き出したら洒落にならつてええええええ…シズナ！！後ろ！！」

「わかつてるよ！！」

と、思いつき横にとび、すぐ横をものすごい重量を持つ物質が地面にたたきつけられる。さらに追撃されるのを避けるために大きくバック転をして距離を取りシズナの命を刈り取らんとする主を見上げた。

エミリアの二倍ぐらいの大きさはありそうな大型の自立型起動兵器。色はグレーを基調とした数々の装甲。その関節にあたる部分にはフオトンが流れ込んでいて、中でも特徴的なのは手に持ち地面にたたきつけられている大きな斧。さっきの攻撃はこれによるものだったらしい。

「言ってるそばから動いたね…。」

「なんでそんな余裕なのよ！そ、そんなことより…。」

どうすんのよと続けようとするがシズナがいつもの大きな鎌を構えているところを見て、その質問をひっこめる。

「ま、まさか戦うの！？」

「大丈夫だつて。これぐらいで死ぬほど私は弱くないしね。…エミリアは？」

とシズナは軽く微笑みながら聞く。嘘は言っていない。ただ、エミリアを守り切れるかは微妙ではあった。

シズナは常に一人で戦うスタイルなので、誰かを守りながら戦うなんていうことは、一、二回ぐらいしかなく、スヴァルティアというそれなりに強い相手とやりあうには経験が不足している。いや……。

「…何が何でも死なせない。」

と、小さくつぶやく。初めてシズナに「人」のあたたかさを教えてくれた人物の言葉だったから。意外と侮れない人の意志の力。

「う…うう、ううううー。」

とそんな決意はつゆ知らず。エミリアはしばらく唸るがうがぁーと吠えてやけになったぽい口調でこういう。

「わかったよ、私も覚悟を決める。あんたの大丈夫って言葉。信じるからねー！」

え？と後ろにいるエミリアに振り返る。そうしてシズナは言いにくそうにいう。

「ええと…水を差すようで悪いんだけど…よかったらそこで見てほしいなー…なんて…」

「あんただけに闘わせるわけにはいかないでしょー！！」

と、さつきまで、シズナに丸投げしていたエミリアが言い切る。彼女にいったい何があったんだろつか？少しハイになっちゃった？どう説得しようか悩むものの、さすがにそんな時間はもうなかったので、あきらめて前に向き直る。

「分かった…気をつけてね。」

その少しした後、もしかしてすこし信頼されてる？ということにシズナは気づいてうれしかったけど顔には出さなかった。

「それじゃあ、まずは斧をよけるコツから……いや、エミリアには危ないよね……。いや。斧が当たらないくらい遠くから銃かテクニクでうつてて。」

「わ、わかった！！」

その投げやりな声を聴いてやっぱりやけになってる気がする……とシズナは思いながらも目の前に集中する。あの斧が直撃したらさすがにシヤレにならないし。

「まずは……」

と小手調べに斧を地面に叩きつけ、無防備になっている腕を切りつける。が……堅い。傷をつけるだけで終わってしまう。

「致命傷には程遠いかあ……エミリア。適当にテクニクうつてみて。そっちにスヴァルティアが行かないようにしてあげる。」

「わ、わかった！！」

そんなさつきと全く同じ返事をエミリアは返し、一瞬のタメの後にフォイエを放つ。その火の玉はぎりぎり肩に命中しわずかに体をよるめかし、まあまあきいてるっぽい、ぐらいの反応を示すもののはり決定打にかける。だが、十分隙を作れるぐらいの威力ではあった。

「それなら……。絶対に私にあたらないように私の言ったタイミング

でテクニクをうって。タイミングが合えばどこにあたってもいいから。」

「わ、わかつた！！」

本当にわかってる？一字一句違う返事を聞きながら考えるがその思考を隅に追いやる。集中集中。

そして今しがた組み立てた作戦を脳内でシュミレートしそれを実行に移す。

スヴァルティアは相変わらず馬鹿みたいに斧を地面に叩きつけ続ける。それが狙いだった。

そして叩きつけ、わずかに硬直した瞬間。完全に動きの止まった斧に乗りかかりそこから腕に駆け上がりジャンプ。だが途中それを防ぐとスヴァルティアは空いているもう一方の腕でシズナを叩き落とそうとする。

「エミリア！今。」

「いっけええええええええええええええええ！！！」

今度は違う返事をしたエミリアのテクニク……ディーガをくらいシズナを叩き落とすことは失敗に終わる。そしてそのまま邪魔もなくスヴァルティアの頭と同じ高さまで飛び上がる。

「首を切り落とすのが楽な生物は結構多いんだよね。」

そうつぶやきながらエレクションを横一文字に尻払う。手に一瞬の抵抗を感じるが問題なく両断。首を落とし、首がおちるガンツという音と同じタイミングで綺麗に着地。足に軽い衝撃が伝わる。

「死んだかな……。」

「お、終わったの…」
「たぶん。」

それを聞いてエミリアは呆然とするが、その実感がわくにつれその顔は徐々に歓喜へと打って変わる。

「やった！あんなデカイの倒しちゃった。すごい！あんたを信じてよかった！」

「…おい、エミリアー。」

シズナの呼びかけも聞いていない。あれだけ強そうなのを倒せたのがよほどうれしいみたいだった。

漫画とかだったら第一部完。みたいなテロップが出るのだろうか？
但本来の目的の脱出をしていないことにいつ気づくのだろうか？
でもなんとなく子供のようにはしゃぐエミリアを見るとシズナはこっちまでうれしくなる。それにしても初対面である私のことをよく信じる気になったなと思う。

そんなことに気を取られていたからだからだろうか。

首がないのにもかかわらず再び立ち上がったスヴァルティアが。

エミリアにその鋭い爪を突き立てんとしていることに気づけなかったのは。

「っ！エミリアー！！」
「え？…」

不味い。ノーランティスを取り出す余裕もない。シズナははしゃぐエミリアを見て油断した自分を呪った。

間に合えっ！

そう願いながら、エミリアを体当たりで突き飛ばす。視界の隅でけがないエミリアを確認し間に合った…とほっとした束の間。シズナはエミリアの代わりに自分の身に危機が訪れていることを悟り慌てて身をよじる…が遅かった。

突如背中にまるで熱した鉄金をあてられたような痛みが襲う。そのまま視界がだんだん不明瞭になっていく…、意識が遠のいていく。

死ぬのかな…

まいったなあ…まだ約束はたしてないのに…

シズナはそう胸中でつぶやきながら意識を失った。

第二話 脅迫は犯罪なり。よいこのみんなは脅迫なんてする大人にならないよ

「ふわあああああ……」

と、スヴァルティアにざっくりやられたはずのシズナが大きなあくびとともに起き上がる。

「あれ…?」

疑問に思った理由。それは何で生きてるんだろ?なんてことではなく、珍しくちゃんとしたベッドで寝ていたからだった。残念ながら貧乏なのでほとんどが野宿。

とりあえず上半身だけ持ち上げ、眠気眼で周りをぼーっと見渡す。そうするとおそらくキャストであろう女性がこちらを見ていたことに気づく。

「あら、お目覚めネー、わたしチエルシー。よろしくネ。」

「は?えーと…」

その君、もしも目が覚めたら目の前に見知らぬ人がいていきなり自己紹介してきたらどうする?返せないよね。シズナの反応も仕方がないだろう。…いや、この状況は、男だったら「ひゃっほう!」ってなるのかもしれない。

「あなた、名前は？」

「あ…シズナです…というか…ここは…えと…あつ…あああつ！」

「オウ!びっくりしたヨー…いきなりどうしたノ？」

「そ、そうだ!エミリア!エミリアって子知りませんか!?ケガとか!」

ちよつとずつ脳が覚醒し、レリクスでのことを思い出し始めると真つ先にエミリアの顔がよみがえってくる。

「エミリアなら、ちよつと元気なかつたケド、健康そのものだヨー」
「あ、そうなんだ…よかつたあ…」

シズナは我ながらバカなことをしたもんだと思う。あの後エミリア一人でデュラハントタイプのスウルティアをどうにかできたかと思うと…全くの無駄死になる可能性だつてあつた。

それにもしあれで死んだとしたら、自分のせいで一人の人間が死んでしまったなんていうトラウマの要因になるかもしれない。

そこまで考えてはつとしてざっくりいかれた背中を手でさすってみる…が全くもつて痛くない、違和感もない。傷一つ残っていない。あれは絶対致命傷だと思つたのだが。意識なくなる寸前に決して流してはいけない量の血だまりで来てたような気がするのだが。

「ま、いつか…」

今は生きてる。そして、異常なこともない。だつたらいい。シズナにとつては些末な問題である。ちなみに夢だとは夢にも思わないシズナだつた。…駄洒落じゃないからね？違ふからね！？一体この語り部は誰に言い訳してるんだらう。

「どうかシタノ？」

「なんでもないです。それで私にどうしてほしいんですか？帰つてしまつてもいいんですか？」

帰る場所はないから、出ていくの間違いかもしれない。いや間違いのような気がする。いや間違いだ。

「もう、大丈夫ナノ？」

「はい。」

「それじゃあ、シズナ。シャッチョサンガ呼んでるネ。歩ける？」

「…たぶんいけると思います。」

さっそく立ち上がってみるが立てる確率はたぶんだったからか、両足に力が入らずふらふらとこけそうになってしまつ。それを慌ててチエルシーが支えてくれた。

「ホントに大丈夫？無理はしないホウガ…。」

「もう、大丈夫です。」

ホントに少しだけだったので、行きましよう。とチエルシーを促す。それをチエルシーはすこし心配そうに見ていた。

「ああん！嫌だ？甘えてんじゃねえぞこら。いいから来い！」

と、受話器を少し腹正しそうに置き先ほどから待っていたシズナに体を向ける。

「ったく、あのバカ娘は…っと、よお起きたみたいだな…それで、

なんでそんなに離れてるんだ？」

「…おはようございます。…それと離れてることに關しては突っ込まないで。」

誰かに電話をしていたビーストの男がシズナに話しかける。特長は目元まで髪で隠れた胡散臭いおっさん。この事はチエルシーに最低限の知識をもらえた。ここはリゾート型コロニーグラッド6という場所らしく目の前にいるシャチョサン…クラウチは軍事会社リトルウィングの取締役らしい、そうは見えないね。というか微妙に酒臭い。酒でも飲んでたんだろうか。…いや、机のモニターにいろんな女性の水着写真が羅列されてた。昼まっからこれを見ている大人を見れば、ガキにとってはどっちもだらしく見える要因になりえる。働けよ。

「もう昼過ぎだな。まあ、そんなことはどうでもいい。さてと…まず、お前は何でここに居るかわかるか？」

「教えてくれたほうが早いと思うけど。」

「まあ…それもそうだな。まあ、簡単に言えば、あのあと、レリクスに閉じ込められたお前ら馬鹿二人を有志の人間とリトルウィングの社員たちが救出したんだが、エミリアはいいとしてお前さんは身元は知れねえからとりあえずうちに招待したってわけだ。」

「そう…救助活動されたんだね。」

「…あのバカもいたし仕方がなくな。お前さんはツイてだ。」

「あの馬鹿……って、え？もしかしてエミリア？」

「ああ、そうだが。」

シズナはあれだけ難しそうなことをペラペラ言っていてすごいなあ…とおもっていた相手がバカだったことにショックを受ける。あれで馬鹿って普通の人はどのくらいすごいのだろうか？いつの間に入

の教育水準はそんなに高まったんだろうか。と、まあそんなことはまあいいやで流すが、それとは別にシズナは嫌な予感がしてきた。なんかこう、シャチヨサンの雰囲気というか…それてきなものが。

「さて…めんどくせえから単刀直入に行くぞ。お前、うちの会社に入社しないか？」

「きっぱりと断りたい。……一、二回手伝うぐらいならいいけど。」

いろいろと理由はあるが、第一にちよつとした目的もあるし。社長がこの人だつていうのもちよつと。それでも少し手伝うのは助けてもらった恩というものからきている。が、シャチヨサン…要するにクラウドがそんな内心を知るはずもなくそれはそれはあくどい笑みを浮かべる。完全に悪役のゲヘとか言つてそんな幹部が浮かべそうな笑み

「いや、それだけだとまだ足りなえな…。ま、急な話だしな。断るのも仕方がないな。まあ、働かねえってなら、護衛代金やらをなんやらで百万メセタ払ってもらうが？」

「…それって脅迫？」

「何言つてんだ？ 正当な報酬だろうが。」

「額が多すぎるって…」

クラウドもわかつているだろうがそんな金はなかった。常にギリギリの生活だったし。とそういえばと財布をのぞき、今持っている金額を確認する。

………

………

………

……… というか、百万じゃなくてもつと安かろうが払えそうにないことに気づいた。… 正当な額でも無理っぽい。… 貧乏が嫌になったの

は久々だ。

「しょうがないか……代金分働いたら出ていきますので。」

ただ今を持ってこの人は、上司となつたので口先だけは敬語を使う。その返事を聞いたクラウチは上機嫌に、ちょうど暗い顔してやってきたエミリアを視界にとらえる。

「よっし！決まりだな。…とちょうどいいタイミングで来たな。エミリアーこっちだ。」

「おっさん…今日ぐらい勘弁し…って、あれ？シ、シズナ！？無事だったの！」

「あ、エミリア。…目が少し赤いことを除けば元気そうだね。泣いてた？」

「う、うるさいー！」

さっきまでため息ばかりついていて、少し泣いていたエミリアの顔が驚きに染まる。

「それにしても…よ、よかったあ。生きてたんだ…。」

「そうみたい、それと今日からしばらくここで働くから、よろしく。」

とさっきまでと違い、にこやかに話す。それなりに人見知りするほうでチエルシーやクラウチとはどことなく堅い口調で話していたのだが、不思議なことにエミリアにはあまりそんな気持ちにはならなかった。

「そうんだ…あーでも、私は戦いとか苦手だから…。」

「何言ってるんだ、エミリア。お前も働くんだよ。シズナ。お前にパ

「トナーとしてエミリアをつけてやるから、よろしくやってくれ。」
「ちょ、ちょっと、何勝手に決めてんの！私の意見もきいてよ！！」
「バカヤロ。お前が来てから金が羽をつけて飛んでいきやがるんだよ。もう少し働け。それともお前ひとりで働くか？」
「うぐっ…そ、それを言われると…あーもう！わかったわよ！」
「エミリアはいいかもしれませんが…子供にそんなこと任せてしまっているのですか？」

シズナにとっては素朴な疑問だった。基本的に子供は大人より信用がない。どこだってそうだろう。社会の常識。

「あん？別にいいんだよ。お前さんの噂はよく聞かし、実力は申し分ないだろ。見つけた時もレリクスの最深部だったんだ、噂倒れの可能性も低そうだしな。」

何だろう、この洞察力。とシズナは思うのだった。たいてい、初対面の人はそこいらの町娘ぐらいにしか見なく、一発で傭兵だと気づいたのはこの一生でもほんの数人なのに。昔何かやってたんだろうか？ただのダメダメな大人じゃないのか？と、その会話を聞いていたエミリアが口をはさむ。

「噂？何の事？」

「おめえには関係ねえよ。ほら、さっさとパートナーを部屋に案内してこい。」

「何よ。感じ悪い…それじゃあシズナ。いこ。」

「あ、うん、…それではクラウチさん。失礼いたします。」

そんなわけで脅迫してみた…っていうか脅迫そのもので強制的にシズナは代金分働くまでリトルウィングに所属となった。

まあなし崩しのにだらだらと長居することにはなるのだが、それは

まあいいじゃない。

第二話 脅迫は犯罪なり。よいこのみんなは脅迫なんてする大人にならないよ

シズナ「もう一つの小説のほうでもやっている、何がしたいんだかよくわからないコーナー。こっちでもたまにやることになったみたいです。」

よくわからないとかいうな！これには深い意味がなあ……………

……そうだな。よくよく思い出してみると何がしたいんだか自分でもよくわからないや。

シズナ「やっぱそうでしょ？」

そうだな、うん……何なんだろうな……ハア……

シズナ「作者が落ち込んだので、とりあえず今回はおしまいです。作者が【感想書いてくれると嬉しいです】だって。」

第三話 今回のエミリアはほとんど寝ています

「ZZZ…」

「ZZZって…とりあえず毛布かな。」

と、自分のベッドのはずなのにいつの間にか寝ていたエミリアに毛布を掛けておく。疲れてたのだろうか？

自分のせいでシズナが死んだと思い込んだことにより自己嫌悪におちいり、昨日はほとんど寝ていなかったエミリアだった。エミリア本人しか知らないことだが。それにしても…とエミリアの穏やかな寝顔を見る。

「不思議なものだよね…。」

と、小さくつぶやきながら、寝ているエミリアの頭をなでてみる。

するとくすぐったそうに頭を動かし寝返りを打ってすやすやと寝息を立て始めた。

エミリア相手には不思議と人見知りしなかった。元にシズナは今のようにはポンポンと頭を撫でることすらできる……一応同年代なのだが。

今まで出会ってきた人とは無意識のうちに距離を置いていた。たまにその距離を踏み潰して仲良くしてくれた人もいたが、最初からシズナが普通に話すことができた人はいない。大切な恩人だった人でも、最初は警戒感丸出しで接していたぐらいだ。

「まあ考えても無駄かな…」

そんなこと思いながらぼーっとしていると、ついさっきクラウチから渡された新品の端末（持ってなかったからくれた）がピロピロピ

口と鳴る。

「おお…なんかなってる…。」

と、先ほど、使い方は教えてもらった気がするが、ほとんど覚えていなかったもので、五分ほどかけてようやく届いたメールを開くことに成功。差出人の欄にはクラウチの名が乗っていた。内容は仕事の事。入社早々に来たこのメールを要約すると「仕事しろ。」のとこと、やれやれ…と思いながら立ち上がる。

「ふう…人使いがあら【待って…】ん？エミリア？起きたの？」

と、ベッドのほうを見てみると予想とは違い、相変わらずエミリアは気持ちよさそうに寝ていた。…が、目の前でありえない光景が広がっている。シズナはもう慣れてきたもので、今度はなに…というあきらめに似た思いでそれを見る。

「ここのなら、話すことができそうだから…」

「…えーと。」

………ヒ、ヒト？いやでもなんか…こう。

「透けてない？」

「私は精神体ですから。」

うん、わけわからん。何を言ってるの？

人が立っていた。見間違いでなければエミリアの中から出てきた。しかも微妙に光ってる気すらする。

「自己紹介が遅れましたね。私はミカ。わけあってこの子の身体に

住まわせてもらっているものです。」

「エミリアに……エミリアは大丈夫？ 害があつたりは？」

「はい、その心配はありません。私もこの子を傷つけるつもりはありませんから。」

「それならいい。」

と、興味が失せたので、また周りの観察に戻る。

「え？ あのだ……。」

「おおー星が近い……宇宙だしあたりまえなのかな。」

「あのだ……。」

「うーん……欲を言うと、こういう部屋より和室のほうが落ち着くんだけ……。」

「すいません、話を聞いてもらえませんか？」

「……………」

ほおをギューっとなねる。痛い。結構痛い。思いっきりやったから痛い。

「やつは夢じゃない……。」

「ああ、そういうことですか。はいこれは現実です。」

「解ってる……まったくレリクスの臨死体験といい……。」

「いえ、正確には臨死ではなく実際に一度死んでいます。」

「……そうなんだ。なんかテンション下がる……。まあいいや、それで？ 何がしたいの？」

「はい、ちよつと、話を聞いてくださりませんか？」

それに対してシズナは、聞くだけなら、特に問題はないだろう。というのが三十パーセント。もう一つは、もうどうにでもなれ……というあきらめ七十パーセントからこういつていた。

「…どうぞ。」

「はい、それでは…。」

それは、ものすごい突拍子のない話だった。例えるのなら、幼い子供が考え、両親に笑顔で聞き流されそうな話。それなりに成長した人間が大真面目に言ったら、病院に連れて行かれそうなお話。

「…要するに、旧文明人？ってというのが人の身体をのっとしてやるぜ！って言ってる。けどミカは反対だから私に止めてほしい…と？」

「はい、要約すればそうですね。」

「……………」

「あの……………」

さて、どうしよう…と思ったものの、ミカの目は真剣そのものだった。それなら礼儀として、はっきりと正直に答えるべきと思いなおした。

「悪いけど、信じることはできない。」

「……………そうですか。」

ミカは見るからに落ち込んでいた。だって、証拠もない、信憑性もない。それにまだ初めて会ったばかりの人だ。そんな人をそこまで信用することはできない。こんな話を信じれる要素が何一つとしてないのだ。だけど…

「けど、まあ…協力はしてもいい。」
「え？」

ミカの顔に驚きが浮かんでいた。

「さっきも言ったとおり、その話は信じられない。旧文明人がなに
してるなんて言われても訳が分からない。でも、私に悪意があつて
話してるんじゃないってことはわかる。だから信じるかどうかは置
いておいて、協力はする。……要するに信じるかは保留するけど手
伝うぐらいはする。以上。」

昔からシズナは人の悪意には敏感だった。しょっちゅうそういう感
情をぶつけられて育ってきたから。

「っはい！今はそれで十分です！」
「あっそ……。」

ものすごい喜んでいた。正直これだけでそこまで喜んでくれるとは
思わなかった。返事を保留したただけなのに。

「ほんとつにありがとうございます……。」
「いや、まだ信じるとは決まったわけじゃないし、そんなに喜ば……。」

う、うーん……。

「あ、エミリアが起きそうですね。それではまた今度……。」
「あ、ちよつと……消えたし……。」

何だったんだ…と、思う。

そして、ミカの言つとつりエミリアが目覚ます…………。

「エミリア？」

エミリアSIDE

エミリアのシズナに対する印象は、変わった子。だった。

レリクスで普通に昼寝してるし。

かと思つたら戦闘はものすごく強いし。…戦えないから応援しようと思つてたら、応援する間もなかった。だって、ものすごい速さで敵に近づいて、いきなり身の丈以上ある大鎌で一刀両断。

かと思つたら、戦闘時以外はなんというか…病院で寝たきりなんだけど今日はたまたま調子がいいから、久々に外出しているお嬢様です。と言われたら簡単に納得しそうな外見。しかも人見知りするらしく、ロビーでバスクという人に話しかけられていた時は、どこことなく堅い声でうつむき加減でじゃべっていた。それがものすごくかわいいと思つたのは本人には秘密にしておこうと思う。

「エミリア…？」

「ふわぁ…………うん…シズナ…？」

と、いつの間にか寝ていたらしく、目を開けると、シズナは少し不思議そうな顔でエミリアを見ていた。

「どうしたの…？」

「あー…なんでもないよ。」

と、なんかはぐらかされた気もするが、微妙に寝ぼけているエミリアはあまり不思議に思わなかった。その時、シズナの端末がピロピロと鳴り、シズナがそういえば…という顔をする。

「エミリア、私はちょっと、行かなきゃいけないところがあるから。ちよつと行つてくるね。…ここで寝ててもいいから。」

「え？どこに…？」

「エミリアが嫌いな…いや…よかつたら一緒に行く？」

「う、うん…。」

と、寝ぼけている頭でとりあえず返事をしてしまった。まさか、いきなりたたかうことになるとは思わなかった。危ないやつは全部シズナがやってくれたけど。

第四話 漫画とかに出てくるヒロインの趣味が歌だったりするとき、ものすん

未開の熱帯雨林。それなりに暑く、常人なら「暑いな〜クソっ!」
っていつて精神的に結構イラつくぐらいの暑さ。そして見渡す限りの植物。…そして、失礼ながら非常に音痴な歌声。

「シズナ…。」

「ラララー…エミリア?どうしたの?」

シズナはかなりへたくそな歌を口ずさんでいた。

別に、ドラ。もんとかでよく見る、ガキ大将の怪音波ではないにしろひどい。地声が女性ゆえの高い声なのに、無理やり低音の効きすぎた声を出しているところが見事にミスマッチしている。それなのに、本人はすごく気持ちよさそうにうたっているので、エミリアもなかなか「下手クソ」という本音をいいにくかった。

さて、話を戻そう。なぜこんな全く人がいないところでなぜシズナは音痴をさらしているかというと、単純にクラウチの依頼だからだ。モトウブの熱帯で人探し。ワレリー・ココフという名前。

…借金の取り立てらしい。エミリアの仕事の士気も最悪だった。しかし完遂しないで帰っても、クラウチに怒鳴られるのでしぶしぶついてきている。今もシズナに愚痴っていた。

「あー…あのおっさん、もう少しちゃんと働けての…ついには依頼まで私物化して…」

「まあ…それで働いたことにもなるしいいんじゃない?…楽な仕事でラッキー。みたいな。」

「うーん…そうかもしれないけど…なんかこう…釈然としない!シズナからいつてやってみてよ!」

「こんな小娘の言葉をまともに聞くわけないでしょ。…とりあえず、

今回の仕事を成功させてみたら？」

シズナにとって基本、社会は信頼第一だと思っている。過去に何度か、いきなりギルドとかに依頼紹介してなんて言っていた時期もあった。しかしすぐにまともに取り合ってもらえないことを悟りやめた過去がある。

「こんな小娘って…シズナはすごいじゃん、私と違ってものすごく強いしさ。それに比べ私は戦うのは苦手だし…調査も嫌いだしさ…」
「戦うのが好きなんて…」

いない。と続けようとしたがとある人物の顔を思い出し口をつぐむ。あの人微妙に戦闘狂っぽかったな。などと考える。あくまで微妙にはある。

「…まあ、ほとんどいないでしょ。」

「そうかもしれないけどさ…私は特に向いてないというか…」

「まあとにかく。頑張ってみたら？私も手伝うからさ」

「うん…」

やっぱりやる気なさげである。まあそつちのほうがいい気も…などと思いながら、シズナはまたへたくそな歌を口ずさみ始めた。

そこにはかなり珍しい光景が広がっていた。

生い茂る木の中を抜けるとそこには見渡す限りの船、船、船。右も左も船、船、船。ミカの話ほどじゃないにしろありえない話である。ここいらはまさに何もない熱帯。娯楽施設なんてものもない。文化

保護地区故にモトウブではもうあまり見ない自然はあるものの…原生生物が出て危ない。パルムとかニューデイズに行ったほうがいい。そんな理由があり、人が来るとしても学者様とか、物好きな奴らとかぐらい。…明らかにこの数は異常だ。

「なにが…エミリア。ちょっと周りを見てくるから。危ないかもしれないしここにいて。」

エミリアの返事を待たずに船の合間を移動する。なぜか船しかない、人っ子の一人もだ。

船も見えなくなり、そろそろ原生生物が出てきそうだなってところまで進むもののやはり誰もいない。

「収穫なしか…そろそろ、エミリアも心配だし戻りますか…」

もともとこういうのは得意じゃないのでさっさと来た道に戻ろうとする。がしかし何気なくやった視界の端にあるものをとらえ足を止める。それは岩に刻まれている奇怪なものだった。

「カーシュ族の文字…ここらへんに来てる？」

カーシュ族。いろんな種族が入り混じった一つの部族であり原始的な生活を営んでいる。その部族は各地を転々としていて、行く先々にはぐれてしまった仲間にしかわからないように文字を残す特徴がある。それがたぶんこれになるのだろう。シズナは過去に一度訪れたことがあったので一通りは読める。

さっそくシズナは文字が刻まれている岩の前にかがみ解読を始めた。相変わらずのド下手な歌を口ずさみながら。

カーシュ族の文字のほとんどを解読したところで、エミリアがやってきた。

「まだ歌ってるし…シズナーこっちこっち」

「エミリア？ってあれ？」

何気なく声がしたほうに振り向くと、視線の先にエミリアと後ろに子供の男女がついてきていた。が、子供特有のあどけなさが全くない。尖ってる耳から見てビーストと見当は付ける。

と考えながらカーシュ族の文字から目を離す。それを見ていたエミリアが何見てたの？と聞く。

「カーシュ族の文字。この先にいるみたい」

「へえ…あんた、その字を読めるのかい？」

と、エミリアと一緒に来ていた少女？が驚きの声を上げる。

「何日かこの村で世話になったから」

「ふーん…あ、自己紹介がまだだったね。私はリイナ・リマ。フリーの傭兵なんだ」

それに続き少年？のほうも続く。

「俺はトニオ・リマだ。夫婦で傭兵をやってる」

「…ああ、傭兵だったんだ…となると小ビースト？」

「そうだが…よく気づいたな」

見た目は十二、三ぐらいにしか見えなく、おそらく何度も子供と間違えられたのだろう。しかしそれにしても霧困気とか物腰に違和感がありすぎる。

「霧困気。それでエミリア。何で一緒なの？」

「この人たちも奥に行くんだって」

「…もう少し詳しく」

リマ夫婦の説明も合わせると、リマ夫婦は見回りの依頼を受けてここに来たものの、人っ子一人いないので見回りにもならないから奥に進もうか。となったところで、心細そうなエミリアを見つけ事情を聴き。だったら一緒に来るか？となったらしい。

「そつか…トニオさんにリイナさん。わざわざありがとう」

「何、大したことじゃねえよ。それで、あとはどうするんだ？」

「どうするって…まだ、目的達成してないし…」

「は？目的？…そんなのあったのか？」

トニオが驚きの声を上げる。シズナはゆっくりとエミリアを見る。ブイツと目線をそらされた。

「ちゃんと説明した？」

「……誰にでも忘れることってあるよね」

「まあいいけど…」

シズナはトニオたちに向き直り、本来の目的を話し始めた。

第四話 漫画とかに出てくるヒロインの趣味が歌だったりするとき、ものすん

ちよつと素朴な疑問があるんだ

シズナ「何？」

デューマンってなんで眼帯つけてんの？ヒューマンがデューマンになるたびに買ってるの？あれ。

シズナ「…さあ？」

いや、デューマンじゃんあんだ。

シズナ「いや、小説のキャラだから。作者が知らないこと知らないから」

…それもそうか。それじゃあこれを読んでる皆さん。妄想でも何でもいいので、知ってたら、もしくは持論があつたら、感想欄までお願いします。

第五話 カーシュ族の村への道中にて…なんで何事もなく進めないんだろうね

主人公の武器の鎌を、画像つきの攻略サイトを見たらそれっぽいのがあったので変えました。

第五話 カーシュ族の村への道中にて…なんで何事もなく進めないんだろうね

事情を説明したら、ここまで来たんだし一緒に行こうぜ。とのトニオの提案により一緒に行動することになった。目的地はとりあえずカーシュ族の村。理由はそこぐらいしか目印になるものがないからだ。

「カーシュ族か…久々だな…」

「そういえば、行ったことがあるんだよね。どんなところなの？」

シズナの思わずといった感じのつぶやきに少し後ろにいたエミリアが話しかける。

「原始的…かな」

「原始的？」

「まず機械とか文明的なものは皆無だし。食料も動物を狩ったり植物を採取したり自給自足。…自然と共生してる感じかな？」

「…なんか大変そうだね」

「居心地はいいよ？ふらっと迷い込んでそのままそこに永住するっていう人も多かったし」

「ふーん…」

そんなふうに雑談しながら、四人の即席チームは結構簡単に原生生物を虐殺していた。さすが夫婦というか、トニオとリイナはまさに息ピッタリ。トニオが攻撃を受けたら、わきからリイナがドーン。逆もしかり。って感じ。シズナのほうはコンビネーション？なにそれ？と言わんばかりにエミリアに一番近い敵から順番に虐殺している。ちなみに虐殺というのは比喻でもなんでもない。

「…エミリア。―…いや三步ほど前に」

「うん？なんで？」

といいながらもエミリアは指示ど通りに前に三步前進。その瞬間にエミリアのすぐ後ろを火の玉が通り過ぎて行った。

「…ってあぶなあ！っていうか、す、少し焦げたって今！背中らへん！」

エミリアの姿を横目で確認し、元氣そうだし大丈夫かと判断。そうしながらも体は勝手に動いており先ほど火の玉をぶつけてきたワニっぽい原生生物の位置を素早く確認。蒼い輝きを持つ大鎌「エレクシオン」を取り出し三本の光の矢で貫き、絶命させる。光属性であるナ・グランツと呼ばれるテクニック。

なぜ、今まで鎌として使ってきた武器でテクニックがうてるのか？それは単純にこの武器がロッドに分類されるものだからである。といか本来の使用用途はこつちが正しい。

とある恩人の…名前をロイドという人物にこの武器の先っぽが鎌のようになっている形状を見ながら「それ案外近接行けるんじゃない？」と言われ試したところあら不思議。ものすごい切れ味だった。

「大丈夫。焦げてないから。それよりちゃんと周りを見たほうがいいよ？」

「う、うん…気をつける。」

少し落ちこんだものの別にエミリアの筋は悪くないと思うのだ。シズナにとってはちょっと複雑なことに。

「つと、リイナ。目印。」

「あ、ほんとだ…えーと。」

シズナは何気なく視線をやった大木の根っこあたりに発見した文字を指さす。それをリィナが文字を解読しはじめ、自然な形でトニオは周りを警戒。後ろからエミリアものぞく。

「ふむふむ…やっぱり結構独特の文体だね…」
「見てて面白い…？」

村に行つたときに無理やり覚えさせられたシズナだった。あまり頭の出来がよろしくないシズナにはものすごい重労働だったにちがいない。

「いや、見てればそのうち覚えられそうだしね」
「へえー…」

すごいねーと思うシズナと、いや無理でしょ、思うリマ夫婦だった。

「ラ・メギド」

シズナは敵の頭上に真つ黒な重力球を作り出し花つばい原生生物を押しつぶして動きを止める。その隙に一気に距離を詰め大鎌を一閃。そして手がかすむほどの勢いでエレクションを後ろに振りかぶり両サイドから近づいてきていた二体の原生生物相手に豪快に横薙ぎ。まとめて消滅させる。ここまで約五秒。

「なんか前に来た時より凶暴になってる気がする」

「同感だな…あの大量の船といい、なんかきな臭くなってきたな」

と、トニオとシズナがつぶやく。

「何もなければいいけど…あ、あった」

隅っこの岩肌に、カーシュ族の文字を発見。たまたまりイナより近くにあったのでシズナがしゃがみこみ、解読を始める。そしてまたエミリアが後ろから覗き込みへえーとかほおーとか言い始め…

「あ！そうすぐ、目的地だね。…ふむふむ。今までと違って暗号みたいなのじゃないね。よかったよかった。ああいう頭を使うやつは疲れるから…」

と思ったなら解読に成功していた。

「はっ？（え？）」「」

見事にトニオとリイナの声が被る。

「ん？どうしたの？そんなに驚いて」

エミリアはトニオとリイナを見ながらきょとんとする。シズナも読んでみると確かに目的地はそう遠くないところではある。…すごいなあ…最近の教育水準。こんな短時間でもう理解できるんだ。えいさいきょういく？と相変わらずシズナはものすごい勘違いをしているところである。

「…どうしてわかるんだい？」

「え…どうしてって…ずっと見てたし」

「それにしたって理解早すぎねえか？少なくとも俺にはさっぱりだぞ」

「そ、そんなことないって！ちゃんと見てなかったただだよ。シズナだって、これぐらいすぐに覚えられたでしょ！」

「いや…一カ月かった」

確かにあまり難しい言語ではない。だがトニオの言うとおり、徹夜しまくってもおそらく一週間はかかるだろう。数回見ただけで覚えられる代物じゃない。

「そ、そんなことないって、ちゃんと集中してなかったただだよ！」

「ふーん…そつか」

「いや、常人だったらそれが普通だと思うぞ？」

「ああもう！とにかくここを抜ければすぐなんだから！早くいこ！」

エミリアが走り出したその瞬間。

「そこの奴！とまれ！」

「エミリアっ！」

「え？…」

突如響く少年の声。それとほぼ同時に飛来する矢。シズナはすぐさまエミリアを突き飛ばす…そして一瞬遅れての肩への激痛。肩を見るとオレンジ色の矢が深々と突き刺さっていた。

「シズナ！」

エミリアの悲鳴じみた声が聞こえてきたが、それを無視し矢の飛来

した方にダツシュしながら「ヨノハテ・印」という銘を持つ刀を取り出す。真っ黒な刀身を持ち、刃の部分だけは鮮血のように赤い日本刀。

そのシズナを見て襲撃者は何やら手を天に突きだす。それと同時に襲撃者の前に魔法陣のようなものが出現した。

ミラージブラスト。がシズナはそれにお構いなくさらに加速。後ろで赤いモンスターのようなものが出現したことを感じる。…そう、後ろで。

「遅い！」

「くっ…」

なぜかその叱声にはわずかな失望感があつた。

そして片手で保持していた「ヨノハテ・印」で袈裟切りの斬撃を放つ。ミラージブラストを放つために無手になっていた少年には受けとめるすべはない。が…その顔を見た瞬間さすがのシズナも驚く。

「へ？ユー君！？」

「お前…！」

だが、必殺の一撃はそう簡単に止められるものではない。シズナはそれを悟った瞬間に勢いを殺すことはせずになぜかに刀の向きを変え峰打ちに変え変更。その斬撃は首筋に吸い込まれるように命中。襲撃者…ユートは何もできないまま崩れ落ちる。

「危なかったあ…」

今のはほんとにギリギリだった。あと少し気づくのが遅かったらこの真っ黒な刀身を持つ刀はユートの命を狩りとっていただろう。

「ちょっと、シズナ！大丈夫なの！？」

「うん、平気」

ほっとすると同時にはしる肩の激痛に顔をしかめながら、こっちに駆け寄ってくる三人を待った。

第六話 炎はすべてを灰にする

「ちょ、ちょっと！やっぱ痛いんじゃないの！？」

少し肩の痛みに顔しかめたのに目ざとく気づいたエミリア。怪我した本人はというと少し血が出てるけど命に別状はないレベルなので特に慌てたりはしない。

「これぐらいはなれてるって」

「それでも治療はしたほうがいいよ。ほら傷口みせな」

「いい。自分でできる…それよりユーく…ユートの方を見てほしいのだけど」

「ユート？この子の事かい？」

地面に寝かせた少年を指さす。それに対してコクンとうなずくとリイナは何も言わずに気絶している少年の傍らにしゃがみこんでくれた。それを横目にシズナのほうはいったん地面に腰を落ち着ける。

「さて…なんか布的なものあつたかな…」

「ねえ…ほんとに大丈夫なの？」

相変わらずエミリアが心配そうに傷口を見てくる。今までニート生活だったエミリアはあまり血を見慣れていないのだろうし、当然の反応かもしれない。

「大丈夫だよ。もう慣れてるしね」

「ホントに？」

「ほんと、ほんと」

といって、シズナは安心させるように多少無理して微笑む。そうしてナノトランサーからハンカチを発見し、傷口を思いっきり圧迫する。少しすればこれで止まるだろう。

「これでよしと…リイナ、ユートは大丈夫だった？…当身だから大したことないとは思っけど」

「うん…それだけだったらそうかもしれないけど、ここに来る前から怪我してたみたいなんだよね。」

「怪我？…確かに最初は私にも気づいてなかったし…あれは久しぶりだからすぐには気づかなかっただけ…というより」

気づけなほど頭に血がのぼっていたから。最初の声の荒げようとい

「というかカーシュ族の戦士って穏やかで、警告なしでいきなり襲いかかってくるような人じゃないから…何か非常事態っぽいのは間違いないと思うよ」

「うーんそうなると村で何かあったのかな？」

シズナの考えにエミリアが同意する。

「そうかもしれない…かといって…」

「この子を置いていくわけにはいかないだろうね。それなりに治療機器がそろってる場所で治療したほうがいいだろうし」

トニオとリイナの言う通りだった。たとえ怪我してなかったとしても、気絶しているのを放っとくわけにもいかない。原生生物が出るし。少しだけ四人全員がシンキングタイムに入るが結論は簡単である。

「こっちの船に治療機器なんてものはないし、私は村のほうを見に行く。みんなはユートを連れて戻って」

「え？一人で？私も行くよ」

「エミリアはいきたくないでしょ？」

少しいたずらっぽく言ってみる。エミリアはうつという顔になったが…

「でも、行くの！」

「……」

戦うの嫌いじゃなかったけどか思い思わず口ごもってしまった。それを見ていたトニオが最後にはまとめた。

「まあ均等に二人ずつでいいだろ。俺とリィナが戻るから、お前らで先にいきな」

「ねえ…まだつかないの…？」

「さあ？というか自分でついてきたいって言ったんだから文句言わないの」

勝手についてきたくせにぶーたれております。「そうだけどさー…」

「じゃあ、先に戻っても…」

「嫌だ！私も行くの！」

さつきから全く変わらないやり取りを繰り返す。さつきから帰っていいよと言っても「いく！」の一点張りである。そうして数分は黙々とついてくるもののまた数分後にぐちぐちぐち。

「それじゃあぐちぐち言わな…うん？なんか焦げ臭くない？」

「そう？……あ、確かに…」

さつきから胸の内に立ち込めていた暗雲がさらに深くなってきた。

「急ごう」

「へ？あ、ちよつと！待ってよ！」

カーシュ族の村に行く時はいつも心躍ったものだったのに、今は一歩進むごとに重苦しくなっていた。

その予感は当たった。

目の前に。

赤、一面が赤い。

熱い。

焦げ臭くて。

燃えていた。

植物が、家が、物が。

「なに…これ…ひどい…」
「……………」

一面が焼け野原だった。今でも勢いよく燃えている。が、シズナが見ているのはそれではない。

「悲願への道は開かれた。もうお前たちに用はない。いずこへなりとも去るがいい」

そう言っている。黒衣の男。中二病っぽいというボケは使い古されてそうだから言わないでおく。じゃなくてその手元。赤くて薄い下敷きみたいなの。

「あ！…ミカの事やっぱ信じることにしよ」

「何わけのわかんないこと言ってるのよ！それどころじゃないですよ！？」

そういえばカーシュ族の村に行ったときにも旧文明人を名乗る奴がいたところ思い出す。なつかしいなあ…

「わけわかんないことじゃないです。たぶん重要なことです」

「何で敬語なのよ！ああもう！なんでそんなに落ちついていられるの！あんなにうれしそうにカーシュ族のこと話してたじゃない！そ

れが燃えてるんだよ！」

「あのね……」

こうでもしてないと今すぐにも何も考えずにここにいる全員皆殺しにしかねないんだよ。と、怒鳴り散らしたくなるのをグツと堪える。そんなただの八つ当たりだ。

「む？貴様ら。ここで何をしている」

相手も気づいたっぽい。それに対してエミリアは威勢よく怒鳴り返……

「それはこっちのセリ「危ないからちょこつと後ろにね」わわっ！」

壮としていたのをちよつと乱暴に後ろに引き倒す。そして精神力を総動員させ、なるべく落ちついた声を出す。

「……こんにちわ。これをやったのはあなた？」

「ふん、それがどうした。消えゆく存在よ」

「消えゆく存在って……何を言ってるのよ」

「エミリア。ちよつと離れてて……」

何かを必死にこらえているような表情でそう促す。そして蒼き輝きを持つ鎌「エレクシオン」をナノトランサーから抜き放つ。

「ほう？脆弱な存在でありながら、我と事を構えるつもりか？」

「……………後悔はしてる？」

男の質問には答えずに、不気味なほどに静かに問う。そのお返しは……

赤い刀身を持つ日本刀での斬撃。それを受け止め鰐迫り合いになる。

その刃の向こう側から告げる。

「何を言っているのだ？ 貴様らごときがどれだけ死のうがどうでもいいことだ」

「…そう」

それを最後に、シズナはわざと力をすつと抜く。最初の一太刀で筋力ではかなわないことを早々に見切ってたからだった。

そして、それによりわずかに態勢が崩れる。その隙を逃さずに男の腹に回し蹴り。それを男は後ろに数歩距離を取り、たやすくかわし、あざけるように何か言おうと……したがそれをやめ素早く剣を水平に構える。次の瞬間には稲妻のようなスピードでエレクシオンがたたきつけられていた。

「ほう……」

「よくも……」

男は筋力で勝っているのを生かし強引に鏑迫り合いに持ち込もうとするが、そのころにはすでに別の急所が狙われている。

首筋への斬撃。袈裟切り。足払い。膝蹴りと見せかけてのエレクシオンによる横薙ぎ。

が男は反撃もせず冷静にすべての攻撃を防いでみせた。

「脆弱な存在にしてはやるな…だが」

「え……」

突如目の前から男の長身が消える。そして次の瞬間。真後ろの耳元で…

「だが、まだ甘い」

「——ッッ」

その刀が降られ、脇腹あたりを深くと切り裂かれながら蹴り飛ばさる。少しの浮遊感のちの背中に激痛。

「シズナアッ！」

エミリアの悲鳴じみた声。駆け寄ってくる。「ダメっ」と叫んだが声にはならない。

「邪魔だ」

「あ…っ…」

目の前で振り上げられた刀を前に、エミリアは呆けたように声を漏らす。

必死に立ち上がろうとするもののよろよろとしか立ち上がれない。

「また、同じことを繰り返すの？」

「また、何もできずに見てるだけで終わるの？」

「また、失くすの？」

「ダメだ。」

「嫌だ。」

「もう二度と、二度とあんな思いはしないって決めた。」

「だから…だから！」

「やめろおおおおおつ！」

普段の彼女に合わない雄たけびを上げる。それと同時に…

「イヤアアアアアアアア」

エミリアの甲高い悲鳴。

エミリアの身体にたくさんの筋が浮かび上がり、背中にミラージュブラストを思わせる黄金色の魔法陣のようなものが浮かぶ。

そして、エミリアとは全く違う落ちついた声。

「その力…まさかあなたは…」

「チツ…」

舌打ちを残し、後ろに大きく跳躍し距離を取る。…いや、とろつと

「……………」

「なにっ…」

右手には真っ黒な刀身を持つ刀。左手には巨大な長い光の粒子。後にインフィニティブラストと名付けられる技。

そのとてつもなく長く、普通ならハンドガンでもなければ届かないような距離を踏み潰し、光の剣で跳躍しようとした男を襲った。それにひるみ、動きが止まった瞬間。

いつの間にか目の前で真っ白な少女が武器を振りかぶっていた。何の感情もうつさない顔で。見るものの背筋を魂胆から震えさせる顔で。

右手の黒き刀で首筋を狙う。それをうけ止められても左手の剣で足

元を横薙ぎ、膝蹴りが襲う。

筋力は大して変わっていないものの、攻撃の速さは先ほどとは別人だった。

先ほどまで余裕の表情でシズナの剣を受け止めていた男の顔に赤い線が刻まれるほどに。

「小癩な！」

「……………」

そして、男は焦れたように、あるかないかの隙に刀を腕すじに突き出す。それをシズナは…

「何っ！」

無視して距離を詰める。当然その刀は華奢で真っ白な腕に吸い込まれ血しぶきを上げる。だが、それを引き換えに、隙だらけの胴体に攻撃できるベストポジションに到達していた。

男が驚いたのは捨て身の攻撃を仕掛けたからじゃない。こうするのとに全く躊躇しなかったからだ。普通こういう「肉を切らせて骨を断つ」という戦法を行うにしても誰でもわずかな躊躇がある。要するに少し動きが鈍る。それが一切なかった。まるでこういう時はこうすると相手を効率よく切れる。という冷徹な計算が脳内で行われたかのように。

そして、初めて男が驚愕の表情を浮かべながら大量の血を噴出す。

「クソっ！」

今度こそ逃げた。体力が余っていればすぐにも追いかけるところだったが残念ながらシズナのほうも、もうこれ以上は戦えそうになかった。そこでふうっと…一息をつく。

「今度は……よね」

そつつぶやきながらいつもの彼女に戻る。そして…

「あ、トニオにリイナ。」

「おい！シズナ！なんだこの状況は！やっと追いついたと思ったら…」

「エミリアは倒れてるし…シズナ！あんたも血まみれじゃない！」
「あ…」

そつえば…と自分の身体を見ると腕から結構な量の血が流れてるし、脇腹のほうも痛々しく。真っ白なワンピースが真っ赤なワンピースに変貌している。

「あらら、結構ひどいね。こりゃ」

立っているのも相当にきついだろうに淡々とそつつぶやいた。

第七話 ああ後の事

ああの後。クラウドから通信が来てエミリアが倒れたと報告したら、ワレリーはこっちで追うから（ワレリー？誰？って思ったことは秘密）お前らは戻ってこいとこのありがたいお言葉を受けたのでトニオたちは別れ帰還。怪我のほうはマイシップで適当に応急処置は済ませている。エミリア&トニオたちに預けられたユートはチエルシに預けた。そんでもって今は…

「よあ、遅かったな」

クラウドが空にしたのであろう、酒瓶がいくつか鎮座しているカフエにいる。結構酒臭いのだがシズナはさほど気にした様子もなく向かいに座る。

「すみません。ちょっといろいろありまして」

「そうか」

もう少し多かつたら命に関わるレベルの出血による医師の嚴重注意。血みどろになった服を着替えたり、少しの間自室で怪我により意識を失っていたことを言う気は一切ない。クラウドには関係ないし。クラウドも特に追求することはなくさらに酒を煽る。それを見ていたシズナが

「なんだか、ずいぶん不味そうに飲みますね」

「はっ？確かに安物の酒だが」

「なんとなくそう思っただけですのお気になさらず。それと昼間からお酒ばかり飲んでたらエミリアに嫌われますよ？」

「なんで、俺がエミリアの事を気にしなくちゃならねんだよ」

「娘さんじゃないんですか？」

「ちげえよ……」

娘が最近反抗期を迎えたごく普通の親子だと思っていたが違っらしい。クラウチは嫌なことを思い出したばかりに、さらに一本酒瓶を空にする。

「あいつは、常連のママにあずかるよう頼まれただけの今じゃただの上司と部下だ」

「その割には倒れたと聞いたときはとても心配そうでしたけどね」

クラウチの一瞬酒を飲む手が止まるが、しかし次の瞬間には何事もなかったように平静に戻り、そしてクラウチはわずかに話をそらす。

「んなことねえよ。そういや、そのエミリアだが、さっき目を覚ましたって連絡があったぜ」

「知ってますよ。さっき行ってきましたから」

まあ、クラウチに呼ばれていたこともあって、話もほとんどしなかったが。しかしその言葉を聞いてクラウチは少し意外そうな表情を見せた。

「随分エミリアの事気にしてんな？ お前さん。物騒な通り名もらってる割に」

「あれ嫌いなんですけどね。それに心配なのはあなたのほうじゃないですか？」

「…まあ、それはいいとしてだ。本題のほうだが、ワレリーのほうは俺がとっ捕まえていろいろ聞いてみた」

「それで、何かわかりました？」

それもエミリアの怪我と同じくらい気になっていた。少し期待しながらクラウチを見ていたものの、クラウチはめんどくせえから結論だけ話すぜ。と前置きし、少しだけ真面目な顔をして続ける。

「気が付いたら一面が火の海だった。だとよ」

「へ？」

シズナは思わずといった感じで間抜けな声を出す。クラウチのほうもあまり釈然としていないらしく、少し不満げに続ける。

「気が付いたらあそこに居たんだと。本人はグロウドッグ地方に言った覚えもないらしい」

「そんな……」

「まあ、そうなる気持ちもわかるが、あいつとは長い付き合いだ。嘘じゃねえ」

「……………」

少しショックを受けたような顔をして、無言で顔を俯ける。しかし、次の瞬間にはいつものエミリア以外の人間に見せる無表情に戻っていた。クラウチにとってその変化はエミリアと同じ年の人間には見えなかった。そしてその表情と同じように淡々と話す。

「そういえばリーダー格の男以外はどこかつろな目をしてましたし……洗脳とかでしょうか？」

「かもな。そういう技術がないわけでもねえ。だが、証拠があるわけでもないからな」

そう。他にもトニオ・リイナが捕まえた数人もワレリーと全く同じ反応しかせず、物的証拠も何一つ残らなかったのだった。身体検査もしたものの特に体に異変もなかったらしく、健康そのもの。しかし、

クラウチとしてはどうでもいいらしく、さつさとまとめにかかる。

「ま、うちには関係ないことだな。お前さんも荷物を抱えてたにしているいい仕事だったと思うぜ」

「……………」

シズナは相変わらずの何を考えているのかわからない顔をしていたが、やがてゆっくり立ち上がった。

「はあ……………」

無人のマイシップで必死に我慢していたため息を盛大に漏らす。ただ信用してるわけじゃない人に感情を見せるとろくなことがないからだ。だが、まだ子供ゆえかな。完全に隠しきれるものではなかったが。

「それでも、強くなったつもりだったんだけどな…」

一人になってから各地を回って。強いつて評判の人や原生成物に片っ端から挑んだりして。

おかげでバーサーカーなんて物騒なあだ名をつけられたが。その名前を聞いた時に乙女な心は少し傷ついたが。まあ今は関係のあることじゃない。

それより、あの黒服男だ。そして村。

一面が植物であんな勢いで燃えていたのだ、あそこら一帯はもう焼野原だろうし、カーシュ族の何人かも巻き込まれただろう。

何もできなかった自分に腹が立つ。いくら強くなったってあそこでは意味がなかった。

精神面のほうは自分ではよくわからないが、技術的には強くなった自覚がある。今ではたいていの原生生物は虐殺できる自信もある。でも、それでも。

「結局…戦うことぐらいしかできないんだよね…」

やはり溜息しか出てこなかった。

第八話 ほとんどしゃべってるだけの話

「ここにもいないし…」

洋服等が並んでいるショップを覗きながらエミリアはため息をつく。エミリアはシズナを探し求め当てもなくぶらぶらしていた。さつきまでおっさんといたらしいが、その後は行方知らず。真っ先に彼女の部屋に向かったがPMのジェイしかいなかった。そのジェイというPMとシズナの初対面時にちよつと一悶着あつたのだがそれはまた別のお話。

「はあ…」

さつきからため息ばかりだ。今日一日で残りの人生の幸せが全部逃げたんじゃないかと思うくらい。

なぜか？さつき旧文明人のミカとご対面したからである。

そしていきなり、ちよつと透けてる美人な女性に、今グーラールが大変なんです。HELP！なんて言われた。普段だつたらは信じなかつたかもしれないが、半分透けてたり、いきなりあらわれたり、その他いろいろ常人には無理じゃね？という離れ技を見せられまくつたせいか妙に納得してしまった。心の整理がついたがどうかは別として。

しかし、ため息をついてる原因はそれではない。今探し求めている本人。シズナのほうだ。

「一度死んだつて…」

そのことだ。

ミカ曰く、シズナはスヴァルティアにざっくりやられて死にかけた

ところをミカが助けたらしい。ここでポイントなのがその死んだ原因が自分にあるということだ。

端的に言えばエミリアの脳内では自分のせいでシズナが死んでしまった。そう思ってるわけだ。いやまあ、生きてるけどさ。

そんな事実はい最近まで二トだった少女の肩には重すぎたのだった。罪悪感がものすごいことになっている。さっきまで大泣きである。目が充血して真っ赤である。もともと赤いけど。

「はあ…あと探してないのは…マイシップ？」

取り合えず広場の中央に鎮座しているワープ装置に向かった。

一方シズナのほう。

こっちも落ち込みタイム中。しかし、後ろで誰かが来た気配がしたとたんに、なんでもないよ？という表情を作るところはいつもどうり。しかし、来た相手に気づくとふっ表情を和ませる。

「誰？…あ、エミリアだったんだ。どうしたの？」

「あ…シズナ？…えと…偶然だね」

自分で探してたくせにそんなことを言うエミリア。

「まあ、エミリアがここに来ること自体が驚きなんだけどね。一人

で仕事でもする気になった？」

ここはマイシップであり、あくまで仕事場所に向かうための移動手段である。

「あ、いや…その…シズナに…用事があって…」
「私に？」

さつきシズナに対して偶然だねって言ったばかりなのにそんなことを言い出す。

そして、エミリアは口を開きかけて…やめて。また開きかけて…やめて。それを何度も繰り返すエミリアを特に急かすでもなくじつと優しく見ているシズナを見て、やがて意を決したようにちよつと大きな声で言う。

「ごめん！」

「……えーと……」

シズナの脳内では「えと…その…なにが？」というセリフが脳内をよぎっていた。何かをされた覚えは一切ない。その疑問が通じたのか…いや、違うだろうな、偶然だろうな。話を補足する。

「あのさ。さつきミカから聞いたんだ。その…あたしのせいでシズナが死んじやったって…」

「あーなるほど…でもあれは私の不注意だし……うーん……」

さて、困った。シズナとしてはもうそんなことは、どうでもいいので、さつさと忘れてくれたほうがありがたい。かといって、こういう時に「気にしないでいいよ」なんて言っても、それで気にしなくなりそうな性格ではなさそうなのはわかる。どうしよ？

「何度謝っても許してもらえないかもだけど……ごめん……ほんとに悪か……」

「…えい！」

とりあえず頬を真横にムニユーっと伸ばしてみた。これが伸びる伸びる。

「いひゃ！いひゃいひい！」

「あら？なかなか伸びる…ギネス目指す？」

「ひゃめへ！ひゃめつつて（やめて！やめてって！）」

「ふむ？ただ伸ばすだけじゃ物足りないと…それじゃあ上下運動を…そして回転させまーす」

ぐにゅぐにゅ。むにゅーん。

「ひょうひゅうほんふあいひゃはい！（そういう問題じゃない！）」
「解ってるよ。しょうがないな…」

しぶしぶ頬から手を放す。エミリアはまだヒリヒリするらしい頬をさすりながら、シズナを恨みがましい視線をぶつけていた。

「何すんのよ！」

「あ、怒った？ごめんごめん」

「当たり前でしょ！あー…まだひりひりするよ…」

「ごめんっていつてるじゃん。ね？」

さすがにやり過ぎた気がしてきたので素直に謝る。

「まあ…それならいいけど…」

「それは良かった。それじゃあ、これであいこね」

「へ？」

「いやさ。さつき、自分のせいでシズナが死んだーとか言ってたでしょ？だから今のでアイコ。終わり。以上」

こんなのしか思いつかない私って…と、軽い自己嫌悪に陥る。仕方がないじゃん。まともに一緒に過ごしたロイドは落ち込むという行為と無縁の存在だったんだから。むしろ、慰められる側。

そんなことを思ったが、その考えに反してエミリアは幾分楽にはなつたようで、さつきよりはましな表情になっていた。

「うん。ありがとう」

「何の事？私は何かした覚えはないけど」

少し気恥ずかしそうな表情をしながらそんなことを言う。お礼なんと言われたのはいつ振りだろ…と心の内でつぶやく。気づくとエミリアはにやにやした顔をシズナに向けていた。

「…なに？」

「いや？あんたのそんな表情は初めて見たなあーって」

「う、うるさい。私はもう戻るからね」

すこし顔を赤くしながら、エミリアに背を向け自室に戻ろうとする。

「あ！待って。もう一個あるんだけど」

「ん？なに？」

足を止め、振り返る。

「私に闘い方を教えてほしいの」

一番エミリアの口から聞きたくなかったセリフを聞かされた。多少明るくなった空気がまたもや重くなる。

「……………」

「どうしたの？黙っちゃって」

「どうして、そんなことを？」

「私はいつまでも、シズナに守られっぱなしってのが嫌なの」

さつきと違い強い意志を宿した目。ああ、これはもう何言ってもダメか…と思いながらも言いたことは言っておこうと思い、エミリアの目をまっすぐに見る。

「…別にさ。戦わなくてもいいんじゃない？」

「へ？」

「だからさ、他にもいろいろ道はあるでしょ？こんな危険な仕事じゃなくても、チエルシーみたいな受付嬢とか、ケーキ屋さんとか、アイドルとかさ。それが、お互いに好きになれるような人でも見つけて、付き合って、結婚でもして、幸せな家庭でも築けばいい。そんな平和な生活をするっていう手もあるでしょ。」

「……………」

これが、嘘偽りのない本心。さつきだって、一歩間違えばエミリアは死んでた。ユートの弓矢。黒衣の男の襲撃。でも、これは自分勝手な考え。エミリアを危険にさらしたくないという。自分のわがまま。その考えを無理やり押し付けるつもりはなかった。だから最初で、最後の質問をする。

「これで聞くのは最後にするよ。それでも戦う？」

「それでも…」

それでもエミリアは、はっきりと、まっすぐにシズナの目を見て言い切る。

「それでもやっぱり戦いたい。シズナに任せっぱなしは嫌だよ。あたし」

「…そっか」

そう短く答え深呼吸を一つ。エミリアがそういうなら。私も覚悟を決めなくちゃならない。そう思ったから。

「貴方がそういうなら。一緒に頑張ってみようか」
「うん!!」

その返事とともに一つの覚悟を決める。それはレリクスではその場限りのつもりだった覚悟。

エミリアは何が何でも守る。

そのために、強くなっただから。

そのためだったら。

死んだって…かまわない。

第九話 伏線とか説明とか

最近、依頼の数が増えた。

増え始めたのはシズナを半ば脅迫で雇い入れてからだろう。

まず、彼女は傭兵の間ではかなりの知名度を誇っている。知らなければもぐりだといわれるほどに。

なぜか？まず、単純に強い。たいていの任務は全くの無傷で終わらせて来るらしい。それこそ当該地域の原生生物の一掃なんかは「え？ほんとに人なの？」って思われるスピードで終わらす。

もう一つ。今までかなりの実力者と言われていた傭兵たちが彼女の手により完膚なきまでに叩きのめされている。

ふらつとあらわれて、いきなり勝負を仕掛けられる。かなり強引にその戦いぶりから「バーサーカー」とかその他いくつかの物騒なあだ名をつけられている。まあ、本人はかなり恥ずかしく思っているのだが。中二病かよとか、これでも乙女なんですよ？とか言いたくなる。

まあ、後半は関係ないものの、つまりはそのぐらい有名だという話だ。

しかし…

「そんじゃ。頼んでいいか？」

「はい。了解しました」

全然そうは見えねえよな…と目の前の少女をみてクラウチは思う。というか誰でもそう思うことだろう。それを言ったらチエルシーもかもしれないが。あいつの過去を知るクラウチとしては今のチエルシーはなんかもう…うん。もう慣れたものの再開当初は逆に不気味だったものだ。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねえよ」

そこで今更ながら……いや最初から気づいてただけども。気になつていただけども。その疑問を解消するために口を開く。

「そついや、エミリアは一緒じゃねえのか？」

「エミリアだったら今頃部屋で寝ていると思いますよ」

「ああ？つたく。もう昼過ぎだぞ」

「今回は勘弁してあげてください。ちよつと仕方がない事情があります」

クラウチは知る由もないが仕方がない事情つていうのはシズナが口イド直伝のスパルタ教育をエミリアに課したからである。強くなるには地獄を見るのが一番というのが自論。意味どつり地獄を見てもらつた。たぶん夜までは死んだように眠るだろう。

「そうなのか？まあ、どうせいても役に立たねえしいいか」

「まあ、確かに実力はかなり低いレベルでしょうけど…筋はいいと思いますよ？」

「そうなのか？」

全然そうは思えなかつたものの納得はしておく。

自分よりシズナのほうがたぶんエミリアの事をわかっているのだろうということとはクラウチだってわかっているのだ。

はたから見ればお互いの変化も一目瞭然だ。

特にシズナなんかはその変化が一目瞭然だ。エミリア以外にはほとんど無愛想である。別に無口というわけではなく、他に接し方がわからないといった感じ。

しかし、なぜかエミリア相手だとちがう。笑うことも多いし、楽し

そうにしている。

別にエミリア限定で明るいなわけではなく、ただ単に仲のいい人間だとあなるのかもしれない。

エミリアもシズナが来てから笑顔が増えた。

しかしクラウドとしては興味もないしどうでもいい。

頼んだ依頼をちゃんとこなしてくれればそれでいいのだ。クラウドにとっては。

エミリアだってそうだ。さつさと一人で生きていけるようになり、さつさと出て行けばいい。それで……いい。

「クラウドさん？聞いてます？」

「あ、ああ……ぼーっとしてた」

シズナは一瞬怪訝そうな顔をしたもののすぐに元に戻る。

「まあいいです。それで、あと他に急ぎの依頼はありますか？」

「ちよつと待て……いや、ねえな」

手元の端末をコンソールさせながら答える。

「そうですか。それじゃあ、とりあえず今日は戻ってきませんので明日の始業時間には間に合わせます」

さりと良く分からない事を言い残し、去って行くこととするシズナをクラウドは慌てて飛びとめる。

「おい！どこ行くんだ？」

「ちよつとした私用です。心配せずとも依頼は終わらせます」

「そつという問題じゃね……って行っちゃったし」

まあ、いいか。と思うことにした。

このことに関係のないことではあるが、この日の夜。クラウドの部屋にてエミリアが頭のおかしなことを言い始める。

グラールがやばいとか、亜空間が何とか。

第十話 インヘルト社に行く

「朝帰りつて卑猥な響きがする気がする…」

思春期だからだろうか？

まあそれはさておき、意味的には間違っていないはずだ。今帰ってきたところで朝七時半ちよつと前ぐらい。一応この時間に事務所のほうに顔を出さなくてはいけないことになっている。出席とか、仕事の連絡がある。

とはいってもまとめているのがクラウドである以上かなり適当だ。別に行かなくても「いない？まあいいか」で終わる。様々な軍事会社で臨時で働いた事が何度かあるシズナでもこの適当さにはびっくりだ。なかでも一応依頼は受けつけるが、解決するかは不明なんていうのには驚いた。それでも一応会社として成り立っているのがホントに不思議。

とぼーっと考え事？をしているといつの間にか事務所の前についていた。しかしそこで…

「……えと…エミリア…ア？何して…」

「うー…ミカさー…なんで先に言わなかったの…」

「すみません…」

入り口の真横でエミリアがミカに良く分からないことをぶつぶつと愚痴っていた。いや愚痴つてるといふよりエミリアがグチグチ言つてミカが慰めるというスタンス。正直な話不気味。心なしか他の社員もエミリアの横を足早に歩き去っている気がした。

さて、どうしよう…無視しちゃおうか…と思っているとクノーがちよつと事務所から出てきたのに気づき声をかける。クノーとは仲がいいとまではいかないもののたまに雑談するぐらいの付き合いはあ

るのだ。そんな彼女はエミリアの惨状に気づきながらもいつも通りの調子で近づいてくる。

「シズナ…何かやったのか？」

「たぶん何もやってないと思うけど………っていうことはクノーも何があつたか知らない？」

「そういえば…私にも良く分からないんだが…微妙にクラウチの機嫌が悪かったのと関係してるのかもしれないな」

「クラウチ？下着一緒に洗われた？」

「それだつたら落ち込むというより怒るんじゃないか？」

聞きようによつては冗談のように聞こえるシズナの発言も彼女にとつては大真面目だ。思春期の娘と父親？の喧嘩はこれと相場が決まつているのである。これぐらいしか思いつかないのである。

まあ、クノーも知らないようなのでもう本人に聞いたほうが早いということになり一旦別れ再びエミリアに向き直る。

「おい。エミリアー…」

「はぁ…というか…少し考えてみれば信じてもらえるわけないってわかるもんじゃん……あぁーあたしのバカ…」

「だ、大丈夫ですよ……たぶん…」

「……………」

何だろう。近づきたくない。なんかやる気というか気力というかそういうものが根こそぎ奪われていきそう。しかもさりげなく無視された。ガラスのハートに傷がついた。

後回しにしよう。ミカが必死に慰めているからぶん平気だろうし、少なくとも慰めるときに頬を抓るぐらいしか思いつかない私よりはましだろう。そう思いながらクラウチのもとへ向かった。

「いきなりミカがどうか、旧文明が何たらとか亜空間がやばいとか言い出しやがったんだよ」

クラウチ曰くこういう事らしい。つまりは旧文明人のグルール侵略計画をクラウチに話したら信じてもらえなかった。そんなところだろうか。ついでに中二病認定されたつと。まあ、シズナも最初は嘘だと決めつけはしなかったものの信じれなかったわけだし人の事をどうこう言うつもりはない。今は信じてるけど。カーシュ族の村にも旧文明人はいたのだ。その時はロイドが信じていたのでシズナも疑わなかった。忘れてたけどさ。そういえばミカの事は見えなかったのだろうか？後でエミリアに聞いておこう。

「まあ、それは…とりあえず後回しにしません？」

「お前さんが聞いてきたんだろうが…まあいい。結構急ぎの依頼があるんでな」

「急ぎの…ですか？」

「ああ、まずお前さんにはインヘルト社に行ってもらう」

「イン…ル…ええと…？」

何それ？と思ったが世間知らずな自分にわかるわけないかと思い直し考えるのをやめる。どうせこんな適当なところに依頼するのだから、そこら辺の中小会社だろう。たぶん。

「知らねえのかよ…まあ、あとでチエルシーにでも聞いてとけ」

「興味ないのでいいです。依頼の内容はどうなっているのですか？」

「……原生生物の駆除だ。実験のために捕まえといたのが逃げたんだと。こうなれば始末するのも仕方がないってな。お前さんにはぴったりだろ」

「まあ…索敵系よりは得意かもしれませんが…」

そんなはつきり言わないでほしい。という本音はさておき。

「あとお前さんの他にはエミリア。トニオとリィナで行ってもらう」

「あの二人ですか…」

「不満か？」

「いえ、そういうわけでは」

リマ夫婦はこの前、クラウチがワレリーを追っているときにスカウトしたらしい。別にその二人の事は嫌いではない。普通に世間話などができるかと言われればNOとしか言えないのだが。しかしそれはシズナの問題だ。

「ならいい。さっさと行って来い」

「…解りました」

後は特に不満もないのでコクンと頷く。しかし不満というかなんか難しい問題も待っている。

「どうやってエミリアに声かければいいんだろ…」

コミュニケーション能力がかなり低いレベルにあるシズナには厳しい問題だった。

第十一話 インヘルト社ってなんであんなに無駄に広いのだろう

ここはとてつもなく広いインヘルト社である。ホントに広い。うん、一人だったら不味かったかもしれない。…迷子になるから。少し方向音痴気味だったりする。

さて場所の説明はそこそこにして。

先生…空気が…重いです…

落ち込んでいるのはエミリア一人だけなのに、そのせいでその場全体が暗い。エミリア恐るべし。

しかし。しかしだ。

何事にも例外というものはある。

例えるならば……

例えるなら……

……

……

…まあ、つまりは「何事にも例外がある」ということを言いたいたわけである。

「あんなこといいな♪できたらいいな♪あんな夢こんな…」

つまりは仕事中でありつつ、この重苦しい空気の中で、全く空気を読まずにド下手な歌声でドラ。もんのオープニングを鼻歌で歌うような主人公もいるわけである。

正直力オスだ。虚空にぶつぶつと何かをつぶやく不気味なのが最後尾に。鼻歌交じりで原生生物を虐殺している別の意味で不気味な

のが先頭にいるんですぜ、旦那？

それだけに比較的まともなりマ夫婦が不憫だった。世の中まじめな人間が苦勞するようにできてるんだ。これが。

そして、ついに耐えられなくなったトニオがシズナに声をかけた。

「おい、シズナ。あれを何とかしてくんねえか？とても仕事になんねえよ…」

「…うん、無理だと思う」

半分ぐらいは現実逃避のために気持ちよく歌っていたシズナをトニオが呼び止める。エミリアを復活させればまだましになるだろうと考えたのだが残念なことにシズナでは力不足である。

少なくとも本人はそう思っている。

「…大丈夫だと思う…今ちゃんと幽霊っぽい人に慰めてもらってるし…」

「…それだめじゃねえか？」

「ほら、あんたパートナーなんでしょ？何があつたかは知らないけど行ってあげなよ」

「でも…」

生憎なことに彼女と親密な関係だったのはロイドぐらいしかおらず、その人は落ち込むとは真逆の存在であり、それどころか常に毒舌を喰らわされていた印象しかない。

「リイナが言ってみたら？私より大人だし」

「そういう問題じゃないでしょ。アンタは少し自分に自信を持ちなつて。少なくともあたしたちよりはあんたの言葉のほうが効果ある

から」

「でも……」

「ほら、女は度胸！」

「…了解」

正直納得はしなかったもののこれ以上の問答も意味がなさそうだったので、仕方がなく不気味なエミリアに近づく。

「エミリアー？」

「…ああもう…ミカもなんで最初に行ってくれなかったの…」
「すいません…」

ミカが本気で申し訳なさそうに謝る。しかし、エミリアに対してあまり効果はないみたいだ。…などということをシズナは考えていたわけではなく、無視された時点で少し物騒なことを考え始めていた。

「また無視か……よし。武力行使しよう」

方針を決定したところで、とりあえず「剣影」と呼ばれる刀をナノトランサーから取り出す。この刀の鞘にはフォトンコーティングが施されていて、鞘と刀の二つがセットになっている武器だ。

「ああ…なんであん…ぶべら！？」

エ、エミリア！？大丈夫ですか！？

そして鞘の方で部分でエミリアの頭をかち割る勢いでぶつ叩く。鞘でならぶつ叩いても死にはしない。…本気でやればわからないけど。

「いったああああい…頭の周りを星が…」

「二回も無視するのが悪い」

「……今のであந்தの事が少しだけわからなくなった…」

確かに出会った当初だったらいきなり頭をかち割る勢いで叩かれることはなかっただろう。

「まあ…昔は日常茶飯事だったし…それよりも、さつさと切り替えたら？」

「これが日常茶飯事の生活って何…」

「大したことじゃないよ？どこの家庭でもあるであろう、きわめて一般的な喧嘩」

非常に漫画でありがちであるが、ロイドのアイスを間違って食べてしまった時の事だ。最終的にはお互いに本気で刃物取り出し第三者から見れば殺し合いと差支えない喧嘩へと発展した。まあそこまで発展することはさすがにあまりなかったけど。ちなみにそうなった場合たいていは負けた。

ということは何気なくしゃべってみたら引かれてしまった。

「そ、そのロイドって人は何者よ…」

ちよつと…普通ではありませんよね…

「まあ…照れ屋な人だったから」

そついう問題？と二人に突っ込まれてしまった。というか話が逸れた。

「それはまあ…とりあえず置いておこう。それより今のエミリアの精神状態が問題だと思うのだけど。切り替えなさい」

「そんな簡単にできるわけないでしょ…」

「でもこのままだと痛い人認定だよ？」

「…うつ」

リマ夫婦も今のところはまだ心配気味に見ているが、このままでは痛い人間を見る視線に変わってしまうに違いない。

「うーん…でもさー…この問題ってあたしたちだけでどうにかなる問題じゃないと思うし…」

「ガーディアンズを頼ってみる？ちょうど知り合いいるし」

「ガーディアンズ？そんなの無駄に決まってるじゃん。あんなのあたしに言わせれば無能集団だよ」

「それは世に言う中二病患者のセリフだと思うよ？ほんとにそうだったの？」

「違うにきまつてるでしょ！」

ガーディアンズに対して何か嫌な思いでもあるのかもしれない。しかしそれは結構珍しいことである。

なぜかといえば、三年前のSEED事変で大活躍した伝説の英雄「イーサン・ウェーバー」がガーディアンズに所属しているからだ。誰もが憧れるような知名度を誇っており、イーサンって誰？とでもいえば「イーサンを知らない？おいおい。嘘はばれないように付くもんだぜ？」みたいな反応が返ってくるだろう。そのぐらいすごいそれ故に憧れている人のほうが多く、反感を持っているような人間は少数だ。

まあ少数というだけで、いないわけでもない。なのでさして気にするつもりもない。フオーしなくてごめんね。私の本当に希少な友達よ。今はあまりエミリアを刺激したくないの。と心の底で謝っておく。

「とにかく！あんなのに頼るならおっさんのほうがまし！」
「あっそう…」

正直良く分からなかったもののなんかこれ以上言っても無駄そうだった。なのでこの会話は打ち切る。となると…

クラウチさんを信じさせるしかありませんね…

「そうだよね…」

ミカの発言にエミリアがはあっとため息をつく。どうやらエミリア的にはもうおっさんの信用は完璧に失くしたと思っているらしい。

「まあ…誰にでも失敗はあるしさ。取り合えずこの依頼でも終わらせちゃおう?」

「うん…」

ダメだこりゃ。また頬を伸ばすか…とシズナが脳内会議を開き始めたところでトニオが痺れを切らしてやってくる。意外と短気らしい。

「おい、まだか?」

「うん、まだ」

答えながらもミカにアイコンタクトし納得したような表情を見せながらミカが消えるのを確認しつつ、脳内では頬を伸ばすを採用することに決定し、さてどうアレンジを加えようかと検討中である。

そんな一連の動作が至極隠密に行われことはつゆ知らず。トニオは落ち込み気味のエミリアを見る。

「何があつたてんだ?」

「仕事で失敗したらしい」

「ああ…なるほどな。ま、ルーキーにはよくあるこつたな」

「そうだけど…ね」

原因がわかるのとそれが解けるかは別問題である。がトニオの回答は簡単なものだった。

「それなら、仕事で返せばいいだけだろ。ルーキーが最初何言ったって誰も聞いちゃくれねえ。でも、頑張り続ければその内周りも認めてくれるようになるさ」

「そう…かな…シズナはどう思う?」

何でここで私に振るの? と思いながらも思ったことをそのまま口にする。

「エミリアなら大丈夫じゃない? うん。それなりに強くなれると思うし。自分で思うほどエミリアはダメじゃないと思うよ」

「…そうかな…あんたがそういうなら…頑張ってみようかな」

そういうとさつきよりかなりましになったみたいで顔の影も少しとれている。少なくともぶつぶつぶやくのはやめた。さすがはトニオ。年の功。

「トニオすごい…」

「どっちかっていうと最後のお前のセリフの影響が大きい気がするがな。前から思ってたがお前少し自己評価低すぎねえか?」

「なぜか、私の数少ない知り合いはみんなそう言っただよね…こんなものだろうに」

「おーい! まだ終わらないのかいー!」

ちょうど一段落したところで次に痺れを切らしたリイナの声が聞こえてくる。

「あ、今いくよー!」

さっきより足取りが軽くなったように見えるエミリアを先頭に声の発信源へと向かった。

第十一話 インヘルト社ってなんであんなに無駄に広いのだろう（後書き）

これを書いてる途中に気づいたんだけどさ。

シズナ「何が？」

シズナとシズルって一字違いじゃね？

シズナ「今頃？」

うん、今頃。

シズナ「……………」

第十二話 あのみムルスとかいうぴょんぴょん跳ねる虫が可愛いと思ったのは作

タイトルがいよいよ本編と関係なくなってきた。

第十二話 あの世界とわんぱく跳ねる虫が可愛いと思ったのは作

《アスターク》

今回の討伐目標である。ほかの原生生物も殺れるだけ殺っておいてとも言っていた。

そんなわけでコルトバとかいう四足歩行の……豚？みたいなのかかぴょんぴょん跳ねる虫との戦闘を繰り返している。

なぜいつものように虐殺という表現でないのかというと、虐殺現場を作り出す諸悪の根源がエミリアの援護に徹しているからだ。

左にハンドガンのオブシディアンを握り、右手にエレクションを装備。ハンドガンを使つてのパーティーメンバーの援護（エミリア中心危なっかしすぎるので）を主軸として、余裕があるときに手近な敵にエレクションで切りかかりたりテクニックで数を減らす。

「エミリア！止め」

「任せときなさいって！」

コルトバの足をシズナが打ち抜き、転倒させたところをエミリアが火球をぶつけてとどめを刺す。今のところ狙ったところに全弾命中しているので結構満足だ。周りに敵がいなくなったことを確認しながら少しだけ気を緩める。

「それにしてもアスタークっていうのがいない？」

「まあ、こんだだけ広げりやな。でもそろそろ見つかつてもいいとも思うが……」

エミリアの言う通り本来の目的のアスタークがなかなか見つからない。

「噂をすれば……なんて感じでその角を曲がったらいきなり出てくるかもよ？」

「まっさかー。そんなのはアニメとかマンガだけだよ」

「だよー」

そんな風にエミリアとシズナが和やかにフラグを立てながらその曲がり角を曲がる。

「ほんとにいるじゃねえか……」

「うん。言った本人が一番驚いてる」

トニオと一緒にあって驚く。いたよ。ほんとに。なんか黄色いでかい虫っぽいのが。大きな爪が特徴的。

アスタークだ。驚くのもそこそこにリイナを中心として作戦会議を開催する。

「さて、なんか大雑把に作戦立てておこうか？」

「近づいて斬ればいい」

「あ、おい！」

至極簡単そうにシズナが言いながら一人で無防備に近づいていく。作戦会議二秒で終了。

特に気配を消したり等はしていないので、シズナが己の間合いに入る前にアスタークに気づかれてしまい雄たけびをあげながら接近してくる。

シズナは構えない。正面から、堂々とアスタークの目を見つめる。

「君は強い？弱い？」

そう、誰にも聞こえないようにつぶやく。そして、アスタークは腕を振り上げ、目の前の棒立ちの人間にその威力の乗った拳を叩きつけようとする。当たれば骨の数本は持つていかれそうな豪快な攻撃。しかし、できたのは腕を振り上げるところまでだった。

棒立ちだったシズナは突如目にもとまらぬ速さで腕を動かす。その手に握られたエレクションは蒼い軌跡を残し一閃。振り上げられた腕を切り落とす。

本来鎌というのはその形状ゆえに間合いがごくごく狭く、刃を当てるのにはかなりの訓練を必要とする。その小さい適正距離より近づくければ棒の部分にしか当たらず。離れれば普通の剣と同じようにカラぶってしまう。

しかし、彼女はそんなものはものともせずに、ちょうど腕の甲殻と甲殻の間の柔らかい部分を切断してみせた。

グギヤアアアアアア！！

その苦しい様子をシズナは失望したように見下す。

「弱い…ね」

アスタークの視界には蒼い不気味な輝きがいっぱいに広がっていた。

説教された。トニオとリイナに。

一人で無茶するなとか、どれくらい強いんだか分からないんだから危ないでしょ、とかなんとか。

そんなこと言われてもなあ……っていうのが本音だ。いまいちピンとこない。

だって今までだって一人であんな感じでやってきたし、こんなのもっと危ない状況に突撃したことだって多々ある。

それに対しては結局決着はつかず。珍しいことにエミリアが仲裁に入り後味が悪いながらもさっさと仕事を終わらすことになり……

「これであらかた片付いたんじゃないか？」

トニオがが持っていた武器を簡易亜空間にしまいながらつぶやく。
ちょうど目の前の原生生物の死体が霧散し始めたところだ。不思議なことに原生生物の死体の腐敗は早く、倒して数分すれば跡形もなく消えてしまう。

がしかし。これだけでは終わらなかった。

「しかし、なんでこの警報は鳴りやまねえんだ？」

「確かに……うん？」

「シズナ？どうしたの？」

もう敵はどこにもいないのに一度しまったハンドガンを再び取り出したシズナをエミリアは不思議そうに見る。それに続いてリマ夫婦も。

そしてシズナはそれらの視線を無視して無造作に銃身を構え引き金を引いた。

その小さい銃口から放たれた高密度のフォトンの弾丸はまっすぐに狙い通りの場所を貫ぬく。そこにいたのは二足歩行で軽く成人男性二人分はありそうな巨体なマシナリーだった。グリナ・ビート種と呼ばれていて、距離が離れていれば右手の銃身で弾丸をばらまく。少し近めであれば背中のブーストを使った突進となかなか厄介なマシナリー。

「ちょ、ちょっと！？壊しちゃっていいの！？あれってマシナリーでしょ！？」

「普通だったらだめだろうね。うん」

マシナリーというのは簡単かつ適当にまとめれば、ある程度の簡単な命令なら理解できる自立型兵器だ。主に重要な場所の護衛や、原生生物の殲滅。まあつまりは兵器。

そして兵器というのは人間が敵を倒すために作り上げたもの、ことを言う。3年前ならまだしも今のご時世での敵と言ったら原生生物ぐらいしかない。

前置きが長くなった。つまり、これはおそらく誰かが原生生物鎮圧のために起動させたものであり、シズナが壊していいものではないとエミリアは言いたかったわけだった。

ただまあシズナが言うように今のマシナリーは普通じゃなかった。

「何がよ？」

「銃身をこっちに向けて今にもこっちをハチの巣にしそうだったよ？」

「へ？」

「あ、あなたたちがリトルウィングの方たちですか！？」

エミリアがポカンとしているなか、息を切らしながら白衣を着た男が走って来た。シズナはさりげなく後ろに下がる。どうも自分は初対面の相手に対して冷たい無愛想な人という印象を与えることが多い、周りに任せられるなら任せたほうがいい。ただ単に話すのが恥ずかしくて無口になるだけなのに。最初に反応をしたのはトニオだった。

「ああ、そうだが…あんたはここの社員か？」

「はい。よかった…実は頼みたいことがあります…」

「頼み？…そういえばあそこのマシナリーが襲ってきたらしいんだが…」

胴体にぽっかりと穴が開いているマシナリーを指さす。

「ご存知でしたか…実は先ほど原生生物の鎮圧のためにマシナリーを起動させたのですが…停止命令を出しても止まらずに暴走を始めてしまいました…」

「暴走だあ！？…たく、マシナリーってのはこうなると不便だよなあ…」

人と違って機械だからこういうこともあり、それは過去にも何度も起こっていることだ。それでもマシナリーが使われなくならないのは、そのほうが便利なのもあるから。24時間ぶっ続けで行動できたり、人と違って使い捨てもきく。しかもそこらの傭兵よりは戦闘力も上。ただこの資源枯渇のご時世では運用のコストが高めで昔ほど使われてはいないのだが。あと人間のほうがアクセシビリティに対して対応しやすいというデメリットもありどちらも一長一短。

「暴走ね…原因はなんなんだい？」

「それがまだわからないんです…」

「全部切る？」

端的に物騒なことをぼりつつぶやくシズナ。でもそれやったらインヘルト社の経済的ダメージは無視できないものになりそうでもある。しかし。そうはならなかった。

「暴走かあ…あの。いったいどんな奴がいたんですか？」

「あ、はいGRM系の小型密集系と多脚系…あとグリナビート機が数機ですね」

ふむ、と二、三秒だけエミリアは黙考し始める。

「その多機種が一斉にかあ…もしかしてもっとでつかいやつがいませんか？」

「ああ、はい。現在レオル・バディアが試作稼働中ですが…」

「やっぱり？たぶんそいつの制御装置が壊れているのが原因だと思いますよ。そいつから出てる混線命令で他のマシナリーにまで影響が出てるんだと思います」

「あー…なるほど…理にかなってますね。ちょっと待ってください」

こういうことに対しての専門家っぽい大人をも納得させる推論を披露するエミリア。おかげでリマ夫婦の視線が何とも言えないものとなる。シズナはいつものように得にどうもならないが。相変わらずの勘違いをしているまんまである。

それと同時に後ろのほうからがっしやがっしやと機械音が響いてくる。

「あー…」

「シズナ？どうしたの？」

が、かすかな音でまだ誰も気づいてはいないらしく、誰も反応はしていない。

「さつさと終わらせちゃったほうがいいよね。うん」

「あ？どうしたいきなり」

「すぐに戻る」

私一人で十分だろう。そう思いながら一人でその音源へ向かっていく。

数時間後。ここ近場で大量のマシナリーの残骸が見つかったらしい。

第十三話 難産気味だぜ！（前書き）

自分のサブタイを付けるセンスに泣きそうです。サブタイはそのまんまの意味です。

第十三話 難産気味だぜ！

マシナリーを秘密裏に処理した後に戻ってくると、結局原因はそのレオルバディアとやらだったらしい。そのまま流れでそいつを停止させてほしいという追加依頼も受けた。停止っていうかぶっ壊すだけだ。

まあ、そこまでの道のりは大したことはなかった。エミリアの体力が限界を超えそうなことぐらいだろう。そういう時はいつそ限界を超えてしまった方が楽だったりもする。限界ちょい手前が何気にきつい。全く関係ないっちゃあないんだけど。

それにしてもマシナリーというのは下手な原生生物より簡単に倒せる物だというものを実感した。コツさえつかめれば楽につぶせるのだ。

まず機械ゆえにワンパターン。もともと傭兵はほとんどの場合、身体能力では原生生物にはかなわないのだからいかに相手の動きを読むかが重要になる。そこまでいえばわかるだろうが、もともと慣れているうえにワンパターンなので傭兵にとっては先読みなど非常にたやすいことなのだ。

しかし、その分堅いという特徴がある。

そりゃ機械だし今の人類の技術レベルと予算の許す範囲で、できるだけまで堅くするに決まっている。しかしその「堅い」という部分も慣れれば足と胴体をつなぐ関節などを狙い足を切断するなどすれば簡単に無力化することも可能。エミリアにそうアドバイスしてみたら最初のうちはそれを狙っていたのだが…最終的にはテクニクで強引につぶしていた。諦めたらしい。それがエミリア疲労の一因でもある。

さて、長ったらしい前置きもこのあたりにして。長い道の手を経て（エミリアにとって）レオルバディアがいるという区画に到着したのだが…

「まともに戦うのが馬鹿らしく思えてくるなあ…」

足を切りつけるものの傷をつけることぐらいしかできないことにため息をつく。

デ力かった。ものすごく。

一応職員にレオルバディアの特徴は聞いていたもののそこまでか
いとは思わなかったのだった。まずは足の長さだけでもさつきまで
戦っていたグリナビートの全長の4、5倍はある。

しかもGRM社最新鋭の機械だからかなり堅い。しかもあの巨体
の中は全部弾薬なんじゃない？つてぐらいのミサイルのオンパレー
ド。正直やってられない。

「おい！足に攻撃を集中させるぞ！あれだけの図体をあの足で支え
てんだ。隙を作るぐらいはできるはずだ！」

「モン。ン的な？」

「なんであんたはそんなボケる余裕があるの…」

シズナのギリギリのボケをエミリアが息も絶え絶えでさばく。正直
シズナにとっては多少堅いというだけでさほど脅威に思っていない。
とはいっても瞬殺できるレベルではなく「さて、どうやってしとめ
ようかなあ…」と言うレベル。

「まあいいや…エミリア。ちょっと離れるね」

「わ、わかった！」

何か言いたそうにしていたが戦闘中のエミリアにそんな余裕がある
はずもなく素直に頷く。それを確認しエミリアを巻き込まないよう

に距離を取る。

「結構疲れるからあまり使いたくなかったんだけど…」

とは言いつつもこのままでは埒があきそうにもないことも解っていたので意識を集中させる。

「はあああああああ！」

それと同時に全身から蒼いオーラが視認できる密度でわき出てくる。

インフェニティブラスト。

しかし本人はそんなことも知らない。とある日にいきなり使えるようになって便利だから使う。それだけのもの。「何でこんなものがあるのかではなく、これがあるとどうなるかに意味がある」そう教わったからだった。

「終わらせる…」

そのまま一旦とった距離を再び踏み潰し、一気に接近する。が、ただで接近させてくれるほどレオルバディアは甘くなかった。機械だからこそできる攻撃である蒸溜弾を連続で次々とはなってくる。しかし、それでも彼女は慌てることもなかった。掌の蒼いオーラを広く、薄く展開させシールドのように前に掲げる。

「なんか弱い者いじめみたい…」

このつぶやきを聞くものがいれば「いつもの事じゃね!？」とツツコムだろうが、誰も聞いてはいなかった。それどころじゃなかった

のだ。

自分たちが苦勞してさばいていた数十発のミサイルの雨を、見たこともない技ですべて防いで見せたのだから。

「止め…あ、みんな離れたほうがいいよー」

そんな全く緊張感のない声とともに全身のオーラを左手に集め巨大な、レオルバディアの全長を超えてそうなぐらい巨大なソードを形作らせる。

これの利点は高密度のエネルギーを自在にコントロールできること。盾のようにして攻撃を防ぐことも、カメ。メ波のようにそのまま打ち出すこともソードの形にして切りつけることも可能。そんな変幻自在の攻撃を一般の武器と比べ物にならない威力で攻撃しまくれるのだから弱いわけがない。

そしてそんなとんでもない威力を秘めたソードを。

「はあぁっ！」

鋭く、聞くものの臓腑そのものに響きそうな鋭い叱声とともに叩きつける。

轟音。

土煙。

それが晴れた先には。

「やば…やり過ぎた…」

これを見たインヘルト社の社員はどう思うのだろうか？

いや…その…あの巨体が見事なまでの真つ二つ。

縦にまっすぐ切れております。…というか切るというか焼き切るだ。ビーム。ーベルで切られたらこんな感じになるのかもしれない。これで爆発とかがしたらガン。ムに切られたザ。みたいになりそう。

「はあ…」

「シズナすごいね！！ものすごいかつこよかったよ！！」

軽く…いやかなり深く反省しているとエミリアがさっきまでの疲れが全部吹き飛んでない？ってぐらいのテンションで声をかけてきた。こつというの好きなのだろうか？

「かつこいいって…リオと全く同じ感想を…」

「誰それ？っていうかあれなに！？ビーム。ーベルみたいなもの！」

今回だけで。の使用率がすごいことになってる気がするが気にしない。ともかくエミリアは少なくとも怖がっているというわけではなさそうだ。これで怖がるようならまあ仕方がないとは思っている程度の覚悟はしていたのだが。これで何人の人間に気味悪がられたことか…。

「私も深くは知らないけど…というかいつだったかは忘れたけどいきなり使えるようになって便利だから使ってるだけだよ？…まあ、あれぐらい本気でやると今から戦闘しろって言われても無理なぐらいに疲れるけど」

「前々そうは見えないけど？」

「今気を抜けば0.5秒で倒れる自信がある…っと」

言ってるそばから少し倒れそうになった所を慌ててエミリアが支える。…何気にミッションの途中で初めてエミリアが役に立った瞬間だったかもしれない。

「大丈夫！？」

「まあ…何とか」

そういいながらちよつとふらつきながらも何とか再び立ち上がる。

「それもしかしたらデューマンってやつかもしれないぞ」

「何それ？」

脇からしばらくポカンとレオルバディアの残骸を見ていたトニオとリイナが会話に混ざってくる。

「いや、俺も深くは知らねえけどよ。何でも三年前のSEED封印以後から極少数だが発見報告があるんだと。それでそいつらの特徴

が眼帯と生気のない肌。そんなもって今のインフィニティブラスト
って技が使えるってやつらしい」

「それはまた…見事に当てはまってるね」

「だね。まあ、特に人体に影響があるわけでもないらしいし。安心
していいんじゃない？」

「そこはもともと気にしてないけど」

「そりゃすごいな。まあ、お前も疲れてるみたいだしな。さっさと
報告して帰るか」

そんなふうになんかそれぞれが和気あいあいとしつつさあ帰るか。ってい
う雰囲気になっていると。

びろびろびろ

初期設定の何もいじっていない無機質な着信音が響く。

「あー私だ…ごめん。長くなりそうだから先に行つて」

「それじゃあ、あたいらは先に報告にいってるね」

そういいのこしシズナを除くリトルウィング御一行が報告のため
にさっさと歩きだす。それを確認しシズナは電話をしてきた人間の
名前を一瞥し少し複雑な表情を見せながらも電話に出る。

「要件はいつもと一緒にでしょ？場所は？」

「似たようなもんだが…あいかわらず無愛想だよなあ…おい」

中年のおっさんの声ガラガラ声。シズナにとってはとうに聞きなれ
ている声であり、いつもの呼び出しの電話だ。

「別にいいでしょ…場所は？」

「少しはこう…なんつうの？…ゆとりをもつとっぜっていうか…もう少し俺と雑談してくれてもよくねえ？…っていうか…こっちは仕事柄むさい男ばっかで癒しがねえんだよ…」

「場所」

「……リトルウイングで待ってるつてよ」

「…なんで？おかしくない？」

「知るかよ。本人がそこを指定してきたんだよ。というかいつものとは違って部外者だ。ただ単にお前に興味があるから会ってみたいっただけだつてよ。知り合いっぽい雰囲気だったか？」

「知り合い？」

そうなるとかなり数は限られてくる。知り合いなんてこの世にほんの数人しかいないし。ボツチではないやい！

「名前は？」

「あー…忘れた」

「無能…」

「シンプルなだけぐさつと来るな…まあ、あれだ会えばわかるだろ…なあ、それはそれとして聞いてくれよ。この前ライアのやつが…」

ぶちつと通話を切る。苦手とかそういうわけでなくただ単に人見知りスキルが発動しただけである。あまり人と長話はしたくない。

「早く終わらせないとなあ…」

そうつぶやきながら先に行った仲間たちを追いかけてようとする……がそこでふと気づく。

「そついえば道がわからない気がする…」

いや…その…道案内は自分が方向音痴だからという理由でほかの3人に任せてたから…

「迷子ってやつかぁ…」

まだまだ彼女の一日は長そうだった。

第十三話 難産気味だぜ！（後書き）

自分の一番好きなMSはガンです。

シズナ「作者の趣味とかどうでもいいと思う」

ですよー

第十四話 サブタイをつけるのが夏休みの読書感想文並みにめんどくさくなって

あの後には三十分ほど道に迷いに迷った末に同じところをぐるぐる回っているのを不審に思ったインヘルト社の社員に道を案内されてようやく船までたどり着いたと思ったら、リマ夫婦とエミリアに怒られた。インフェニティブラストの影響と迷ったために無駄に歩いたことも合わせて過労死するかと思った。おかげで船の中で久々にぐっすりだ。あとは普通にリトルウイングに戻ってきた。

エミリアはというと帰ってきて早々にクラウチの呼び出しを喰らっていた。暗い顔をしながら足取り重く去って行くエミリアを見守りつつも、シズナとしては怒られることはないんじゃないかと思う。しかしまあしょっちゅう怒られているエミリアだ。またもや説教だと思いこんでいてもしかたがないのか？どうだろ。そしてシズナのほう。

「はあ……」

こっちはいつもだったら富士山びっくりなテンションの高さになっているような状況なのだが今のテンションはマリアナ海溝びっくりの低さである。

なぜかといえば、この前保護したカーシュ族のユートがついさっき目を覚ましたとチエルシーから連絡があったからだ。…今はチエルシーが相手をしているのだが一切の警戒を解いてくれないらしく、知り合いのシズナだったら何とかなるんじゃないか？というわけでヘルプサインが来たというわけらしい。

さて。シズナとユートは別に仲が悪いわけではない。ユー君などと今の年頃では少し恥ずかしい呼び方で呼ぶくらいには仲がいい。しかし。しかしだ。再対面時に何をしたのか？それが原因だ。

「襲っちゃったんだよねえ……」

いやまあ仕方がなかった気もするのだが……半分ぐらいイラツと来てやった&殺しかけたっていうのもあったりするからなあ……などという理由でどうも会にくい。殺しかけた友人の前に何でもないように顔を出せるほど彼女は大物ではなかった。

「うーん……とりあえず土下座？でももう使いふるされ過ぎて逆に軽くみられる？とりあえずなんかおごってみる？でもそれ餌付けみたい……というかユ-君の好きな食べ物ってなんだっけ……というかこの近くでカーシュ族の料理を出す店なんてないしなあ……というか近くにあるのカフェしか知らないし……」

そんな感じで軽く二十パターンほどシミュレートしながら病室へと向かう。そして到着。プレートの部分にはちゃんとユ-ト・ユン・ユンカースという名前が描かれている。入るうにも入るだけの度胸がわかなかつたのでちよつとドアの目の前で立ち止まる。

そのまま数十分。

「ああもう……メンドクサイ……！とつとと入る……！」

やけくそになりましたとさ。

入るとユ-ト以外には誰もいなかった。チェルシーもないのは想定外だったが。まあそっこのほうがいい。

「おお！シズちゃん！」

「…それやめて。恥ずかしいからそれやめて。いやもうお願いしますやめてください」

「なんでだ？」

この相変わらずな純情な目が痛い。

「世間体というか…私の羞恥心的な問題というか…あー…もういいや。どうぞそのままで」

「そうか」

なんかもうどうでもよくなった。別にいやではないし。ちょっと懐かしいし。

「お兄のしんゆう？は一緒じゃないのか？」

「あー…何年前かは忘れたけど朝起きたら消えてた」

「???」

ユートの頭の上に疑問符が浮かんでいたが気にしない。嘘は言っていない。嘘は。

「それはそれとして…あーそのー…」

思わず口ごもってしまう。やがて意を決して切り出す。

「えーとき。その…怒ってない？」

「何がだ？」

「えと…ほら。その…殺す気でやろうとしちゃったからさ」

「別に怒ってないぞ？」

「へ？なんで」

二十パターンほどシュミレーションしていた内容に最初から起こっていないというパターンは想定外だったのでかなり驚く。と同時に怒り心頭だから逆に落ちついちゃってるパターン？などという疑問もちらりと。

「最初に武器を向けたのは僕だからな。そうしたら後はどう反撃されようが文句は言えないんだぞ？」

「あー…そういえばそんなのもあった気が…」

シズナは一応暇つぶしに…というかあの村での遊び相手はユートとあと一人ぐらいしかいなかったたのでカーシュ族の戦士見習い講座のようなものを隣で一緒になって聞いていたこともあった。どうでもよかったので終わってからの二、三分で忘却の彼方だったが。

ともかく怒っていないようなので何よりだ。

「あー…うん。ならいいや」

「そうか」

ユートとしては当たり前の事だったらしく多少の疑念を混ぜながらも納得する。シズナの方もその返事を聞いて幾分気分も楽になったところで。

ぐー。

ユートのお腹が鳴った。思わず苦笑しながら。

「何か食べに行く？」

「いいのか！？やった」

相変わらず単純な奴だと思った。

「食べたりないぞ」

「我慢しなさい」

ユートの要望をシズナは一言でバッサリと切り捨てる。が、それでもユートはあきらめなかった。

「もっと食べたいぞ！特にプリン！プリンが食べたい！」

「もうすでに十個は軽く超えてるでしょ。終わり」

支払いはユートがメセタ（金の事）を持っているわけもないので当然のように支払いはシズナになるのだからこれ以上の注文の支払いなどやりたくもない。というか最近はいくらか余裕があるとはいえ、最近までは常にギリギリの生活だったので結構けち臭いのだった。とそんな不毛なやり取りをかれこれ十分ほど繰り返していると。

「おつまたせ！」

「えと…エミリア…なの？何なの袋とか箱の数々」

やたらハイテンションなエミリアが登場した。しかも何らかの箱とか袋とか誰かへのプレゼントらしきものがエミリアの両手で山を築いている。おかげで顔が見えずに誰だか一瞬わからなかった。どうやって持てばそんな絶妙なバランスを保っていられるんだろうか？というかそんな状態で会計とかどうやって済ませたんだろうか？

「ん？ボーナスもらっちゃったからいろいろ買物して来たの。あ、この前のカーシュ族の子？ねえ、名前はなんていうの？あたしはエミリア。エミリア・バーシバル」

「僕か？ユート・ユン・ユンカース」

ユートのほうはプリンを食べられなかったことが原因による少し不機嫌気味な状態で自己紹介を返す。

「あれ？あたし嫌われてる？」

「プリンだしてあげればいいと思うよ」

単純なユートならそれ一発で解決するだろう。

「プリン食べたいの？」

「くれるのか！？」

「よーし。それならここはお姉さんが買ってきてあげよう！」

「狩ってくる？」

「字が違つよ…」

というかそんなに使ったらボーナス全部吹き飛ばんじやないだろうか。シズナの常識上はありえないような行為だったがまあどうでもいい。

そしてエミリアはその箱の山をドスンとテーブルの上に落とす。…倒れてきそうで怖い。

プレゼントの山で下敷きになるなんていうマンガみたいな展開はいやだなあ…とか考えながらも、さつさと撤退の準備を始める。なんであつて？ 小心者にはこの周りの視線が痛いんですよ。

「帰るね」

「ええっ！？ なんであたしがきたとたんに！？」

「あははー」

「笑つてごまかすな！ここに座つててよ。あんたに渡すものがあるんだから」

「渡すもの？」

「プリンまだか？」

「ややこしくなるからユー君はちよつとだまつてて」

シズナは仕方がなく席に戻る。そしてエミリアはユートのプリンを注文しながら箱からいろいろなものを取り出す。

「まずこれがチェルシーでしょ。これがトニオとリイナで…」

「早くして」

「なんか冷たくない？」

「いいから。私は小心者なの」

そうおざなりに言うもののエミリアのテンションは一向に下がる気配を見せない。本当にクラウチに褒められただけなのかと言いたくなる。

「まあいいわ。ではでは…」

そして大きな袋からがさごそと何かを取り出す。

「じゃーん！これをあんたに上げる！」

「ぬいぐるみ？」

その袋から出てきたのは巨大なカクワネのぬいぐるみだった。

「…私に？」

「他に誰がいるのよ？」

疑問形に疑問形で返されてしまった。

いやでもこういうものは結構うれしい。というかまともなプレゼントは今回が初めてのような気すらする。ちなみに最初に誰かからもらったプレゼントはロイドからの今も使っているエクシオンである。当時十歳。十歳でこれって…なんか色々間違ってる気がする。

「そんなわけで。いつもありがとう」

「あー…うん。ありがとう」

ということでこのカクワネの巨大ぬいぐるみを取りあえずナノトランサーに収納しておく。マイルームの適当なところに置いておくこ

とにしよう。あ、ちなみに最近マイルーム和室風に改装されました。いまだ未登場な可哀そうなPMの手によって。何気なく言ってみたらすごい張り切っていた。自室には荷物という荷物がほとんどなく掃除のしようもないので暇だったらしい。

「エミリア。そのちっちゃいのは誰のだ？」

と、ユートがいつの間にか届いていたプリンを犬のように食らいつきながら訪ねてくる。

それは小奇麗な小さな箱だった。誰かにプレゼントするような。

「あ、これは…」

そこで突如視界いっぱいが赤く染まり大きな耳障りな音が鳴り響いた。

第十四話 サブタイをつけるのが夏休みの読書感想文並みにめんどくさくなっ

感想待ってます。いやマジで。

第十五話 あははー……思いつかない……

リトルウィング管轄ブロックにて武装した集団が侵入シマシタ！
各ブロックを閉鎖しマス

このいつものゆっくりな流暢な部分を抑えたことなく事務的な声
は間違いなくチエルシーのものだった。

「軍事会社が侵入を許すって……エミリア、ここから動いちゃだめ
だよ……っていない!?」

その放送を聞いてからのエミリア&ユートの行動は早かった。うわ
あ……大変だなあ……すごい不祥事だなあ……どうしよう……強いのかなあ
……潰してこようかなあ……とか思いながらゆるゆると視線を前に戻し
たらあら不思議。目の前にはユートの食い散らかした皿の数々しか
残っていないかった。というかなんで出ていくの？ユートはまだしも
エミリアは戦うの嫌いじゃなかったの？野次馬根性でもあるのだろ
うか。

「まったく……先祖はイノシシかなんか？」

放っておくわけにもいかず、行こうかやめようかと悩むことすら許
されなくなってしまったので、閉まりかけているドアの隙間にその
細い体を滑り込ませカフェの外へと飛び出る。

だいぶ人は少なくなっていたのですぐにエミリアとユートは発見
できた。

侵入者らしき集団に銃を突きつけられている状態で。

「なっ……」

何も考えずに飛び出そうとしてしまいそうな自分の身体をシズナは精神力を総動員させて抑える。

深呼吸を一つ。

落ちつかせる。

まずは状況を見極める。

不味いことにちょうどシズナの位置は距離があるとはいえ侵入者の前。近づけばすぐに見つかる。となると近づくのは不可能だ。

銃で打ち抜くことも考えたが…エミリアに誤射する可能性も考えるとその手は使えない。

そして中でも一番印象的な目を見る。

虚ろな目だった。そしてシズナはこれを見たことがある。

カーシュ族の村が襲われた時だ。

そしてそいつらは全員がエミリアだけを見つめている。隣のユートには目もくれず。

「どうしよっかなー……」

少しおどけた感じでつぶやく。全然困っているようには見えないが多少は困っている。

基本的に相手が一人だろうが無数にしようが一人で戦おうとするような無茶苦茶な行為をすることが多いシズナにとってはこういう状況は稀である。つまりは経験が少ない。

「むう…あ、そういえば手持ちにスタングレネードが余ってたような……」

うる覚えだったがずいぶん前にあれば便利かと思って自作したスタングレネードの存在を思い出す。

ちなみにこのスタングレネードは大きな音をまき散らすような仕組みになっている。しかしただの音だと侮ってはいけない。少しの間耳がキーンとなって何も聞こえなくなるレベルだ。それだけの隙があれば彼女にとっては十分。ちなみに他にも閃光バージョンやその両方など多々ある。一応トラップ系も使うことは使うのだ。そこまでする必要のある敵がいらないだけで。

「これ使った後はゴリ押ししかないかな…」

「それじゃあ、私も協力しようかしら」

行こうと足に力を込めたところで脇からシズナに声をかける人物がいた。尖っている耳や華奢な体型を見る限りではおそらくニューマン。女性。たぶん初対面。

「わかった。耳をふさいでて」

特に断る理由も見当たらなかったのであっさりと承諾し、さっそく安全ピンを抜くと同時に侵入者たちの足元に投げつける。

それと同時に、甲高いキーンというとんでもない音量を誇る音無し差別にまき散らす。

それが響くか響かないかというタイミングでシズナとニューマン（名前不明）が駆け出した。

シズナの目標はエミリアに銃を突き付けている一人。

ハンドガン（違法改造済み）を構え射線にエミリアが入らないように確認しながらフォトンでできた高密度なエネルギー弾ぶつ放す。その弾丸は市販のハンドガンとは比べ物にならない威力で的に命中。侵入者は何が起こったかわからないままに悶絶しながら倒れる。ちなみに嫌がらせを兼ねて男の股にぶら下がっているあれを狙っている。エグイ。

「エミリア！こっち…って聞こえないよね」
「きゃっ、な、なに！？」

なので無理やり腕の袖を引っ張って退避させ距離を取る。ユートの事も忘れてないよ。ちゃんと暴れているのを引きずってきている。

「ああもう！ユー君は暴れないで！」
「何も聞こえないぞ！なんだこれ！？」

おもいつきりパニックっっており無駄っぱいのであきらめる。というか言っても聞こえないんだよね。

さて人質を奪還すれば後はただの烏合の衆。ニューマン女性さんもあの大人数相手に鞭を使って縦横無人に暴れまわっている。

「さてと…少し本気でやってこようかな…」

結構本気な目になってつぶやく。

…軽く数十人はいる集団が壊滅するのにそう時間はかからなかった。

「よわ…何でここに侵入できたんだか…」

「クラウチに始末書を書かせないとね…それにしても相変わらずね」

全くと言っていいほどに息を乱していないシズナは手に持った大鎌をしまいながらつぶやく。弱かった。ものすごく。そしてニューマン（年齢不詳）のセリフにシズナは少し違和感を覚える。

「相変わらず？この人たちの知り合い？」

「……あなた忘れたの？」

「？」

どういうことだろう？

「シズナってこの人と知り合いだったの？」

エミリアとユートが駆け寄ってくる。

「…どこかであったことあった？」

そう聞いてみるとニューマン女性は衝撃的なセリフを口走る。

「私の事を殺しかけておいてよく忘れたなんて言えるものね？」
「殺しかけたあ！？」

物騒な内容の割にはどことなく楽しそうな響きをのせたセリフに対してエミリアの大ききなりアクション。…いや、大きさでもないかもしれない。

「殺しかけた…殺しかけた…あー…えーと…」

そして唐突に電撃が走ったかのように思い出す。

「ウルスラ？」

「そのとおりよ。忘れられたんじゃないかと思って驚いたわよ」

ウルスラ・ロー…ロー…ローランド。そうウルスラ・ローランド。前にあった時は同盟軍のそれなりに高い地位の人間だったはず。が思い出しても疑問が残る。

「殺しかけた云々はあなたが悪い。というかなんで私の事を覚えているの？」

「貴方みたいな子を早々忘れられるものじゃないわよ」

思い出したとしてもシズナは彼女の事を知り合いだとすら思っていない。ただ一回だけあったことがあるというだけの人だ。そこで。

「あー…どうしたあ…喧嘩か？」

真昼間からものすごい酒臭いクラウチのご登場。それを見たウルス

ラが怖い顔をしながらクラウチに近づく。

そして思いっきりの手加減なしのものすごい威力の平手打ち。

バシンッ！！

「言い音するねえ……」

「シズナって注目するべきポイントがずれてると思う」

「そう？」

「こういうことを昼間からする夫婦は離婚寸前だっておにいのしんゆう？が言ってたぞ」

「夫婦なの？」

「違うよ……あれ？ねえ、さっきの小さい箱知らない？結構高めの」

「箱？誰かにあげるって言ってたやつ？」

「うん……」

そんな緊張感のない会話を子供組は繰り広げながらもそんなものはどこ吹く風で大人組は続ける。

「昼間から酒のおいをぶんぶんさせて！そんなんだからここに侵入を許すのよ！」

「侵入？ってことなんだ？テロかなんかか？こんなところでテロ起こしたって何にもないだろうに……」

脳みそアルコール付けでとろけているくせしてなかなか鋭い指摘をするクラウチ。

「そこは後で私が尋問しておくわ。とりあえずこの邪魔なのを片付けてしまいましょ」

そういつてそこらに転がったいる気絶している人間の山を一瞥する。

「あー…わあったよ…ったく…あ？なんだこれ」

そういつてクラウチが拾い上げたのはまさにエミリアが探し求めていた小奇麗な箱だった。しかしさっきの騒ぎのせいかすでに箱はぼろぼろでもう人に渡せるようなものではない。

「あ、それ…」

「なんだエミリアのか？」

「うん…」

「でもまあ、こんだけぼろっちくなってりやもういらないわな」

「あ…」

そしてクラウチはその箱を近くの箱に投げ入れる。それは綺麗な放射線を描きごみ箱にゴール。冬とかにみかんの皮でよくやるよね。しかし。その行為こそが約一週間にわたる親子…親子じゃないんだっけ？まあいいや。約一週間にわたる喧嘩の始まりだった。

「……さ……バ……」

「あ？なんか言ったかよ」

クラウチは絶対に触れてはならない逆鱗に触れたことにも気づかずに近づいていく。

「おっさんのばかあああ！！！！」

「うお！いきなり耳元でわめくんじゃねえよ！」

そのままエミリアは走り去って行ってしまった。クラウチのほうはというとポカンとしている。

「ったくなんだってンだいきなり……」

「プレゼントするとか言ってましたよ？」

「あんなぼろっちいのをか？」

「クラウチ……あんたねえ……」

ウルスラは呆れてもう言葉も出ないという感じでため息をつく。

「お！あつたぞ！」

そんな中KYなユートが大声を張り上げる。そちらを見るとユートの手にはゴミ箱に投入されたことによりさらにぼろぼろのなり、しかも臭いまでミックスされた何も知らない人であればだれがどう見てもゴミと呼べるものを手に持っていた。

「あつたって……そりゃ、俺が捨てたもんだろうが」

「エミリアが探してたものだぞ？クラウチにあげるって」

「……………」

クラウチ沈黙。ようやく自分が何をしたのかを悟ったらしい。

「……とりあえず、後片付けをしちゃいましょう。この倒れてて邪魔なこれは適当な人にやらせるとして、クラウチとシズナはこっちに来て頂戴……って……シズナがいないわね……」

いつの間にかシズナの姿はどこにもなかった。

第十五話 あははー……思いつかない…（後書き）

感想を頂けると作者は小躍りして喜んだりするかもしれませんが。まあ、こんなインドア趣味な作者の小躍りなんて見たって誰も喜ばないでしょうけど。

第十六話 うがあああああああ！！やってられん！！（前書き）

今回もサブタイがロクなの思いつかないシリーズ。

第十六話 うがあああああああ！！やってられん！！

ドン！！ガン！！ガラッシャアアアアンンン！！

「……………帰ろうかな」

「待ちなさいよ」

見つかってしまったのでしぶしぶとエミリアに向き直る。

あのままあそこにいるのもどうせやることないしなあ…という思惑の元とりあえずエミリアを追いかけて来たのだが…来なけりやよかつたと絶賛後悔中である。

ここはマイシップ……だった。過去形。

どのようなありさまかは作者の貧相な描写能力では厳しいので割愛。とにかくひどいということだけを察してくれればいい。

「いやでも…これ巻き込まれると後片付けしなきゃいけなさそうだし…私の家事能力の低さを知ってる？」

「そんなの知らない！！ああもう！まだむかつく…」

微妙にかみ合っていない気がする。そこでさすがにこの惨状を見かねたミカが登場。

エミリア。別にクラウドさんにも悪気があったわけじゃないと思いますよ…

「それだけで済む問題じゃない！！」

ドン！！ガン！！ドガ！！ガラシャアン！！

なんかもうめんどくさいなあ…とか思い始め、よし暴れている間に

こっそり帰ろう。そう心に決めそーつと後ろに後退したところで…

「おー！やっぱりにここにいたー！」

「…シズナ？どこに行こうとしたの？」

ユートのせいで脱出計画は見事に頓挫してしまった。そしてシズナは何事もなかったように話し始める。

「まあ、それはいいとしてさ。ユー君何しに来たの？」

「ちゃんと答えなさいよ。どこ行こうとしたの？」

「ユー君」

「ウルスラがシズちゃんを探しにいつてきてって」

「…どっちもどっちだなあ」

ここから逃れたい気もするものの、呼び出しに答えるにしても、ウルスラのほうは知らないがシズナにとっては初対面とあまり変わらないぐらいの面識しかないのであまり行きたくない。

ちなみに彼女はウルスラの立場がこの社長だということに全く言っていないほど気付いていない。知っていたら仕方がなくといったあたりさまで行っていたかもしれないが、今回はエミリアの相手のほうがまじだと判断。

「まあ…あー…うん。お茶飲む？」

とはいっても宿める方法など見当もつかない。なんか人付き合いを蜂起したツケがたまった感じ。なのでとりあえずナノトランサーからお茶入り水稻を取り出し差し出してみる。ナノトランサーってのは便利だ。ある程度制限はあるもののこまごまとしたものは場所も取らずに瞬時に取り出せる。

「…もらっ」

そしてエミリアの心情をそのまま映すかのようにそれを豪快にがぶ飲みする。そして。

「かつらああああああい!!」

盛大に吹いた。

「…汚いんだけど」

「うるさい!!なんでこんな辛いのよ!!お茶って言ったよね!？」

「?あ、ごめん。これタバスコの原液だった」

「なんでそんなの持つてるのよ!？」

「確か…二年前ぐらいにリオにいたずらの意味でもらった」

「しかも二年前!?!腐ってないの!?!」

「うーん…ナノトランサーにしまってる間は粒子状態なわけだし大丈夫じゃない?」

そんな感じで怒鳴るエミリアとそれを宥めようとして逆効果にしかならないシズナとの見事な泥沼な争いを続ける。しかし、それも最終的には。

「なんかもうどうでも良くなってきたわ…」

「あっそう」

そんなエミリアの疲労によりなんだかんだで落ちつけることに成功。

シズナさんはマイペースなほうですね

「シズちゃんは昔からこうだぞ?」

そうなのですか。ある意味それも…ってえ?

「どうしたんだ？」

ユートが頭の上に？を浮かべている。そしてエミリアやミカの顔には驚愕の表情を浮かべていた。シズナだけは置いてけぼりにされた気分。

「え、えーと。ちょっと今…ユート？ミカの事が見えるの？」

「あー…そういえば普通の人には見えないんだっけ」

「エミリアのスタンドのことか？ミカっていつのか」

「ユー君。それ誰に教えられた？」

「お兄のしんゆうからだぞ」

「うん。全然違う。特殊能力とかないから」

似てるところなんてエミリアに宿っているところぐらいじゃないだろうか。

「ってそんなくならないボケなんてどうでもいいのよ！それよりミカ？ミカってあたしとシズナにしか見えないんじゃないの？」

「見えないはずなのですが…」

「どうでもいいよ。そんなの。カーシュ族的なあれだよ。たぶん。」

「おねーさんは大地様に似てるな」

相変わらずマイペースなユートが言う。

「大地神様？」

「あの黒服に赤くて薄っぺらいやつとられたでしょ。あれに宿ってる」

「？シズちゃん大地神に会ったことあったか？」

「あー…まあ、いいじゃん」

言えない。ロイドが「大地神様つての見てみたいな」とか言って、頼めば見せてくれただろうに、こっそり見に行ったほうが燃えるとか言っただけなんだ。暇という理由でそれについていったシズナもどうかと思うが。

「あの黒いやつか…」

「あの時大地神様の気配がしたぞ！あの時絶対に大地神様をうあばったやつが近くにいた！」

「へえー」

「シズナは何でどうでもよさげなの？」

「もういないでしょ？そしてもしかしたら今回の襲撃の首謀者はあの黒服かもしれない。それぐらいしか私にわかることはないね」

近くにいるなら今すぐユートから場所を聞き出して潰しに行くけど。とは思っている。

「まあ…それもそうか」

「さてと…私昼寝してくる」

そういえばもうとくにエミリアを宥めるという目的は達しているし、話もひと段落ついたところで部屋に戻る…と見せかけての素振りでもしてこようかな。などと考える。毎日夜の寝静まった頃にやっているものの黒服の事を思い出したらもやもやしてきたせいだ。素振りしてるといくらか落ちつく。

「僕は修行したいぞ。久しぶりに模擬戦しないか？」

「あー…まあ、それでもいいか…エミリアは？」

それも悪くなかったのであっさりと素振り計画を取りやめ承諾。ついでにエミリアの特訓にも付き合ってみようかと誘ってみる。

「そうだね。あたしも行くのかな。おっさんの事も少し忘れられるかもしれないし……」

いまだに腹が立つらしい。まあ、せつかくのプレゼントを本人にゴミ扱いして捨てられればそりゃあ腹も立つだろう。

しかし、エミリアは知らなかった。

シズナとの模擬戦というのは地獄へのチケットを得るのと同義だということ。

「お、鬼…悪魔…」

「半分が優しさでできている私になんてことを」

「胃薬？」

今は模擬戦をするためにグラッド6の端っこあたりにある、なぜか空き地になっている場所に来ていた。それなりに広い。

まあ、模擬戦といっても当然のように元二ト娘がかなうはずもなく。ボコボコにされていた。しかもさらにひどいことに集中すればギリギリ防げるかな？ぐらいに攻撃の手を緩めているので、エミリアとしては一時も集中を研ぎらせることができない。非常に疲れる。だったらいつそ本気でぼこにしてもらったほうがましな気もする。気絶できそうだし。ドラマとかで精神的に追い詰められているキャラがいつそ一息に殺してといっている気持ちか少しだけ解ってしまった。

というか、ユートも一緒に二対一で相手にしてるのにこっちが防戦一方ってどれだけ強いのかと。

しかも鼻歌交じりでだ。逆に怖いものがある。余談だがやはり鼻歌は恐ろしいくらい下手だ。精神攻撃の一種だろうかと言いたくなる。最近は暇さえ合えば確実に歌っているので少しづつ慣れてはきたが、そして、さすがにエミリアとユートの疲労度を見かねたのか只今休憩中。

「ゼエゼエ…ああもう…自信失う…連邦の白い悪魔は化け物か…」

「確かに服も髪の毛も白いけど連邦所属じゃないから」

最近こういうネタが増えてきた気がする。

「ああもう！また負けたぞ！」

「ユートとシズナって昔から知り合いなんだよね。その時もやったの？」

「おう！最初にやったのは十歳ぐらいの時だったぞ」

「…そんな前から？」

「六歳のころには廉価だけど本物のセイバーを握らされた」

「つぶう！」

「あれって案外軽いからね」

フォトン粒子でできているのだからそうなのかもしれないがそういう問題ではない気がする。だって同じ年の子供が1+1を習っている間にすでにそんな物騒なことをしていたということだ。

「ま、物心つくころには木刀持たされてきたからね」

「なんで？」

「そういう家に生まれたからだよ」

特に本人はそのことに対して何も思うことはないらしく特に感情らしい感情もなしに言う。

「ふーん…そういうえば、あたしってシズナが昔どんなことやってたか全然知らないんだよね」

「どんな事って…現代の若者らしくやんちゃしてたけど」

「ねえねえ。どんなことしてたのか教えてよ。気になるし」

と言うエミリアの内心はこの会話が終わったらまたあの微妙に地獄な特訓が始まると直感的に悟っていたからだった。ここで何とかして特訓の話を有耶無耶にしてやる！とここ数年でもっとも気合の入っている瞬間だ。

もちろんシズナのほうはそんなのに気づけるはずもない。

「別にいいけど…何がいい？」

「それじゃあ…ウルスラさんとどうであったの？殺しかけたって
言ってたし…」

「ああー…あれはたしか…」

そう言っただけでゆっくりと話し始めた。

ローグス。

それはモトウブを中心に多数の勢力を持つ主にビーストで構成され
た犯罪組織。

とはいってもそれはならず者の相称のようなものであり多数の小さな
勢力が群雄割拠しているような状態だ。

そんな状態故にモトウブは全体的に治安が悪い。

だからこの惑星では「ちよつとした犯罪」で捕まることはない。そ
んなことをしていたら同盟軍もガーディアンズもとてもじゃないが
人手が足りないのだ。

だから、その「ちよつとした犯罪」を何度も繰り返すローグスとい
う性質の悪いものもある。

そしてその被害を一番受けるのは無実の善良な人間たちだった。

これは昔の話。

シズナは無表情で何もない砂漠に近い場所を歩いていた。その先に「ちよつとした犯罪」を繰り返すローグスがいると聞いたからだ。金品の強奪なんかを近くの町に行つてやることが多い。

別に戦うのが好きなわけでもない。ただ、強くなりたい。そのためそのローグスに挑みに行く。それだけの事。

「あつた」

そこには簡素なコンクリートの建物だった。ドアのところには見張りと思われるビーストの男二人。

見張りと言えば二人一組つていうイメージがあると思わない？あ、ない？そうですか。

シズナは見つけても特に変わることもなく近づいていく。

その見張りと話ができるような距離に近づいたとき。さきに反応したのは見張りの方だった。

「おい！ここは女子供がきていい場所じゃねエ。さつさと帰りな」

ドスをきかせた、泣く子がさらに大泣きしそうなそんな声。普通の市民だったらすぐさま逃げ出すような行動だ。しかし、シズナは特に動じることはなかった。それどころかかすかに失望したようにも見える。

「ここ。ラントファミリーって言うローグスのアジトであつてる？」

「ああ？てめえ、天下のラントファミリーを知らねエとは舐められたもんだな？これは体に直接叩き込んでやらないとなあ？ああ？」

「おいおい待てよ。こいつまだガキだが今から仕込めば将来中々の額で売れ……」

下品な笑みを浮かべ、へらへら笑っていた男の言葉が途中でふつと途切れる。

「おい？どうした」

それを不審に思ったもう一人の男がゆさゆさと肩をゆする。

同時に胴体から大量の血しぶきをまき散らしながら倒れた。

「っひい！」

一人から一つへとなった「物」

胴体から血しぶき。

男の顔にかかる。

その顔には恐怖。

シズナの手にはいつの間にか蒼い輝きを持つ大鎌が握られていた。

その鎌からは血糊が滴り落ちていく。

「余計なことはしゃべらなくていい」

その言葉とともに濃密な殺気。受けたものの臓腑を心底から震えあがせる、ひどく冷たい殺気。

そしてその少女は。

どこか悲しく。辛そうな目をしていて。

しかし。それよりも。

ぞっとするぐらい冷たい顔をしていた。

第十七話 ウルスラとの過去編・前篇！

やった…味気はないけど結構ま

次話に続くぜ！

ウルスラとの邂逅編のつもりなのにそのウルスラが出てこないという。

第十八話 ウルスラとの過去編・後編！…さて、また次話からサブタイ地獄の始

途中から何書きたかったんだかわからなくなったZEE！
まあ、過去にこんなことをやってましたよって事で。

第十八話 ウルスラとの過去編・後編！…さて、また次話からサブタイ地獄の始

その女性はまじめで正義感が強かった。

…こういうとカッコいいのだが悪い言い方をすれば堅物。融通の利かない人だった。

その女性…ウルスラもまたモトウブにいた。同盟軍の方でラントフアミリーの鎮圧をすることとなったからだ。

本来は鎮圧されるような目立ったことのやらないRPG的に言えば序盤に出てくる悪の組織の下っ端的小悪党ローグスだったのだが、仕方のない事情があったのかはたまた調子に乗ったのか。近隣の村の住民の半数を虐殺し始めた。

要するに目に余る行為をし始めた。

その鎮圧部隊の隊長としてウルスラが選ばれたのだった。

今ウルスラは多少の満足感を得ていた。

もともとローグスとかそういうのは好かなかった。

犯罪を犯しながらものうのうと生きている輩に腹が立った。

それらの内のたった一つとは言えどもようやく減らせる。少しだけだが犯罪者が減る。

そんなことをウルスラはぼんやりと考えながら数十人の部隊の隊長として行軍を続けている。すると進行方向の方から一人のキャストが大急ぎで戻ってくるのが見え首をかしげる。

近隣の住民に聞いてもはっきりとした場所がわからなかったのだ。ある程度の目星を立ててそこに偵察を放っていくしかなかったのだ。しかし、その偵察のキャストの様子はどこがおかしかった。

「た、隊長！て、偵察より報告です」

「落ち着きなさい！何があったの？」

慌てふためる偵察兵を一括して落ち着きを取り戻させる。帰ったら特別メニューを組ませてやろうかと考えながらも今はそんなことをしている場合でもないのですその思考を打ち切る。

「それで、何があったの？」

「そ、それが…ラントファミリーのものと思われる廃屋を発見！しかも今まさに何者かの襲撃を受けているようで中から戦闘音が！」
「なんですって？」

その報告を聞くと同時にウルスラはあらゆる可能性を模索する。

仲間割れか？他のローグスによる襲撃か？それとも…

ともあれ、ただ戦闘音が聞こえたというだけではまだ何も判断はできない。今の時点で決めるにはまだ判断材料が足りないうえに危険だ。

「だとしても、私たちのやることに変わりはないわ。皆、急ぐわよ

「！」
「了解！」

そこは静かだった。

戦闘をした形跡はあるものの戦闘音は全くと言っていいほど聞こえない。

すでに戦闘は終わっており、間に合わなかったとみるのが正しいだろう。

「…総員、警戒を緩めないように」

と口では言いつつもウルスラはそんなことはしないとわかっていた。それでも同盟軍の中ではこの部隊は精兵だ。油断するような人間達^{キャストだけど}ではない。

到着してから、一番最初に目についたのは入り口のあたりに残されている二つの死体。

それを見つけ、死体を確認する。

両方とも、急所を芸術的なまでの正確さで一撃されていた。

「突入するわ。…まず私が中を確認しに行く…ルークは私と一緒に来なさい。他の人員はあたり一帯の調査と念のため外を警戒」

「了解！」

間に合わなかったにしても中の状況の調査ぐらいは必要だ。

なので部隊の中でも戦闘力は一番上であるルークという全体的に青

色のパーツでコーティングされたキャストの男と一緒に中へと突入する。

中に入ると同時に血生臭いにおい。

「入り口にあった見張りらしき死体とこれらの死体のすべてが急所を一撃されています。これを見る限りよほどの手練れかと」
「そのようね…しかも…」

ギヤアアアアアア…

ウルスラの声を遮るように奥の部屋から響いてくる断末摩。
まだ、戦闘は終わっていないかったのだ。

「ルーク！急ぐわよ！」

「了解！」

バタンツ！

扉を乱暴に開きながらも銃を構えつつ中を警戒する。

その中に予想された光景が広がっていた。いや、少し違う。

何人かの生きている襲撃者とたくさんの死体を予想していた。

違った。

生きていた襲撃者らしき人間はたった一人の真っ白な少女だった。
普段ならば何らかの理由でとらえられていた子供かと思っただろう。

そのぐらい華奢で病弱そうな体だった。

しかし、その手に血糊で汚れている蒼い鎌を握っていた。

その少女が音に気づきウルスラたちを見る。

その無表情な顔は蒼い両目はひどく悲しそうで、ひどく失望したような目をしていた。がウルスラの達の姿を見ると多少表情を変化させる。

敵なのかどうか見定めている目。とでもいうのだろうか。

「貴様！ここで何をしている！」

ルークが銃口を少女に向けながら怒鳴る。

血糊のついた鎌を持っている。それだけで少女に敵意を持つのは彼にとっては当然だった。

キャストゆえの合理主義。同盟軍ゆえの融通の利かなさ。

それが、トリガーだった。

敵かどうかを判断していた少女の目にはそれは自らに危害を加えようとしているようにしか見えなかった。

「そう…」

つまらなそうに言うと同時に。

ヒュンっ！

少女は、人間とは思えないスピードで間合いを詰める。

「なっ……」

「貴方もハズレ……」

ルークは反応できなかった。

相手が十代前半の少女だと確認した途端。相手をなめていた。油断した。

「ハアッ！」

蒼い輝きを持った鎌は確実にルークの急所を襲い袈裟切りをかました。

蒼い閃光を残し一閃。

しかし、彼も伊達に同盟軍の精鋭ではない。油断していたとは言えとつさに身を横にずらし躲そうとする。しかし、それも急所をそらす事にしかならなかった。

キャストなので血が噴き出ることはない。が戦闘を続行できなくなるには十分でがつくりと片膝をつく。

「ルーク！」

ウルスラはその光景が信じられなかった。

彼は多少頭でつかちなことはあっても戦闘力はかなりのものだったのだ。

それが、たったの一太刀で。

「何をぼーっとしてるの？」

「つく……！」

そんな平坦な声とともに少女はウルスラへと狙いを定め、雷光のようなスピードの斬撃。それを次々と繰り出してくる。

ウルスラは普段使うことのないセイバーを巧みに操ってそれを捌いていく。本来なら鞭が彼女の本領なのだがそれを使うには距離が足りなかった。それなりの距離がないと鞭は満足に振るえないのだが、だからと言って防戦一方になるほど彼女は弱くない。

「ハアッ！」

普段ならためらいもあったかもしれない。相手は子供なのだ。しかし、やらねば殺される。人…生物のもつとも強い本能と言われる生存本能がそのためらいを失くしていた。

そのセイバーは狙いたがわず少女の脇腹へと伸びていく！

その時の驚愕した顔が、ウルスラの見た少女の初めての表情らしい表情だった。一度大きく距離を取る。

血が噴き出し、真っ白なワンピースが赤く染まる。

「今すぐ武器を離し、抵抗をやめなさい！」

そう、怒鳴る。しかし、少女はまたもや全く持って予想外の反応を示す。

少女は心の底から、まるで上等な獲物を見つけた猛獣のように。

笑った。

「はは…はははは」

「何がおかしい！」

心底楽しそうに。うれしそうに。

「あははは… やつと… やつと見つけた…」

「何を…」

「旅を始めてからようやく… 初めて… 初めてまともに戦える人がいた…」

そして、少女は獰猛な笑みを浮かべる。

「本気で行くよ」

そして、疾走。

ガキンッ！

さつきと比べ物にならない速さの斬撃。まともに目で追う事が出来ない。ただ、本能の従うままに腕を動かし、セイバーを操り、受け止め、受け流す。

相手の筋力だけは太したことがなかったのは不幸中の幸いだった。しかし、ただでさえとんでもなかったスピードがさらに増していく。しかし、その鎌の動きに気を取られてしまった。

「足元ががら空き」

そして、不意打ち気味の足払い。足に軽い衝撃が走ると同時に天地が逆転する。

自らの喉元へと刃が吸い込まれていくのをウルスラは感じた。しかし、その刃がウルスラの命を奪うことはなかった。

パンッ！

銃声が鳴り響く。

そちらを向けばライフルを構えたルークの姿があった。
それを少女はひらりとかわし一度距離を取る。

「つく…外したか…」

おそらくカーツの最後の力を振り絞ったの射撃だったのだろう。無念そうにつぶやく。それを見た少女が少しだけ考えるそぶりを見せる。

「（キャスト…ローグスは基本的にビーストで構成されてた気が…）
あなた、本当にローグス？」

「違うわよ…」

そういえば…とウルスラは思う。

同盟軍だって言った覚えがなかった気がする。それで…ローグスと勘違いされたと。ウルスラは今頃になって悟った。

「なんだ…」

あっさりと蒼い大鎌を粒子へと変えて、ナノトランサーに収納する。
そして未練もなくさっさと背中を向けた。

「…なぜ止めを刺さないの？」

「意味もなく人を殺すつもりはない」

「そう…」

それを聞いて少し落ち着いてきたウルスラは、殺されかけたにもかかわらずなぜか少女の事を敵としてみる事が出来なかった。自分でも理由は分からない。

「あなた、名前は？」

「隊長！何をのんきに話しているのですか！」

「いいの。ルークは外で傷の治療をしてなさい」

「しかしっ…！」

「これは命令よ」

そういうと、ルークは不服そうにしながらも部屋から出ていった。ちよつと冷たい気もするが、残念ながらウルスラに医療の心得はないのだ。それに外にちゃんと衛生兵もいる。というか、完全に少女の事を敵とみなしているルークがいるとまともな話し合いができなさそう。

そしてルークが少しだけ乱暴にドアを閉めるのを見送ってから再度質問をする。

「騒がしくてごめんなさいね。それで名前は」

「…シズナ」

相変わらずの無表情でぼつりと答える。

「それじゃあ、シズナ。なぜこんな危険なところに一人で来たの？」

「あなたに説明する義理はない」

「私は同盟軍部隊長のウルスラ・ローラン。事情聴取は一般市民の義務」

「はあ…」

そうめんどくさそうにため息をつく、少女はゆっくりとウルスラに再び向き直る。非常に嫌そうである。

「…頼まれたから」

「何を？」

「両親の仇を討ってほしい」

たぶん近隣の大量虐殺が行われたという村のことだろう。

「そんなの私たちが来るまで待てば……」

「信用ならない。そう言ってた」

「……………」

それもそうだとウルスラは納得した。

確かに今までの小さないさかいでは何度要請されても出向くことはなかった。人手が足りないから。

しかし、それは理性の上でだ。それでも今まで血のにじむような訓練を積んできたのだ。それを信用できないなどと言われれば腹も立つ。

感情では理解したくない。

「もういい？」

「まって頂戴。それはつまり、その子供に頼まれたから。それだけの理由でこんな無茶をしたの？」

それに対してシズナはコクリと頷く。

ウルスラは一生忘れられない子だと思った。

見たところまだ年はまだ十四、五才ぐらいにしか見えない。

そんな同年代の子供はまだ遊びたい盛りであろうに、この少女が頼まれたからと言うだけでこんなことをしてしまう。

すこしだけ不憫に思えた。

「まだあるの？」

「いや、もういいわ」

それを最後にウルスラに背を向け、歩き出す。それを見送ってからウルスラは慌てて連絡した。

今から出てくる女の子には絶対手出しはしない様にと。

ローグスと一戦もしてないのに同盟軍全滅なんてことになったら笑い話にもならない。

第十八話 ウルスラとの過去編・後編！…さて、また次話からサブタイ地獄の始

この前文化祭があっただけどさ。

シズナ「まずそれ小説に関係あるの？」

ない。これっぽっちも。

シズナ「そんな気はしたけど」

そのステージ発表で女子がAKBのダンスを踊ってたんだ。

シズナ「帰っていい？」

…その最中ずっと作者の後ろに座っていた男子二名がステージに向かってめっちゃ大声で「超絶可愛い！！」とか意味の解らない踊りをしまくったり腕をぶんぶんまわしまくってた。

シズナ「だから？」

いや、このまだ短い人生最大の衝撃を誰かに聞いてほしかったんだ。リアルでそういうことをしている人を初めて見た。おかげでそっちに視線がいつてまともにステージのほうを見れなかったなあ…今年の文化祭で一番楽しかった瞬間。

シズナ「あっそ」

第十九話 誰だよ！サブタイっていうものを考えたやつは！表に出ろ！（前書き）

最近こういうサブタイを考えるほうが面白くなってきた件
なんか最近小説のほうがグダグダ…

第十九話 誰だよ！サブタイっていうものを考えたやつは！表に出ろ！

2時間。

2時間も一人でこの店をぶらぶらしている客がいた。

その客の特徴は真っ白な髪に、真っ白なワンピース。そしてそれらとミスマッチしている青い片目を隠している黒い眼帯を付けたそれなりに整った顔立ちをした少女。

ここはいろいろなアクセサリーとかブローチとかなんかファンシーな女の子っぽい装飾品が大量に並んでいる店だ。

まあ、そんなところでシズナはむう…と悩んでいた。

始まり今日の朝。チエルシーが「今日はエミリアの誕生日なのでスツカリ忘れテタネー」みたいなことを言っていたので、なんかプレゼント用意した方がいいのだろうか？と言うわけでなんかそれっぽいところをグルグルと周っていた。

しかしだ。

どんなのだといいの皆目見当つかない。取り合えず無難なものを選べば喜んでくれる気もするのだが…なんか適当に選ぶのも嫌だった。

「こういう時にこそリオがいてくれると助かるのになあ」

なぜ、いてほしいときにいないのだろうか？今頃あのトリガーハッピーは何をしているのだろうか？…たぶん恍惚な表情を浮かべて原生生物相手にツインハンドガンぶっ放してるか、上司から押し付けられた書類仕事を部下に押し付けているかの二択だろう。たしか今はガーディアンズで教官クラスだった気がする。ここ数年ほど連絡取ってないけど。

しかし、ないものねだりをしててもしょうがない。再び様々なアクセやらなんやらを物色する作業に戻る。

「ま、なぜかこうやって悩んでるのも少し楽しいんだけど、さ」

不思議なものだ、悩むのが楽しいなんて。

時と場所は変わり、ニューデイズのサクラギ保護区。貴重な桜を保護しようとかそんな感じの区域なんじゃないかな？

まあ、何でこんな所に来ているのかと言うのももちろん観光などではない。仕事だ。

亜空間実験中の教団施設の警護と言う仕事。だったら何で桜の保護地区？なんて突っ込みは封印しておこう。一応こっから亜空間実験の様子も見れるぐらいには近いし。

まあ、それはさておき。

ガキンッ！ガキ！ギットン！

「一発も当たらないぞ…」

「ユー君は動きが単調すぎ…頭使いなよ。フェイントとかさ」

ユートとシズナは模擬戦をしていた。

何でかと言われれば、ユートとシズナが共通して暇だったから。としか言えない。

だって、原生生物とかあまりいないしほとんど突っ立てるだけなんだもの。

仕事を任された人間としてはアウトだが一応シズナは周りを警戒しながらやっているのでギリギリセーフではあるかもしれない。一応ユートをあしらいながらも偶に現れる原生生物が近よってきたとたん…

バンッ！

と言うふうにハンドガンで打ち抜いてはいるので。

「平和だ…」

「それ模擬戦やりながら言うセリフ？」

そう呟きながらも懲りずに正面から馬鹿正直に突っ込んでくるユートの槍を適当にあしらう。

まあ、確かに今回は何も事件が起きない限りここで突っ立っていいのだから楽ではある。

が、しかし。そんな時間は終わりを告げる。

一人の女性の怒鳴り声によって。

「てんめえらあああああああ！ここで何してやがる！…！」

それはもう、すさまじい怒鳴り声で半分ほど夢の世界に旅立っていたエミリアが即座に覚醒したほど。んでもって、シズナの方にはこの声にすごく聞き覚えがあった。

「おいてめこら、ここは一般人立ち入り禁止なんだよ、ガキの遊び場じゃねえぞゴラ！風穴開けてやろうか！」

「…何やってんの？リオ」

「ああ？何であたしの名前知って…っておろ？シズナ？」

その女性はシズナの姿を認めると人が変わったようにその怒鳴り声をひっこめる。

ちようどいくらいに身長も高くスタイルのほうも発育もいい。どれもとびぬけてすごいとは言えないのだが全体的にバランスがいいという感じ。髪は青がかかった黒色で頭の後ろでポニーテールふうにまとめていた。

顔のほうも可愛いというよりは美人という感じなので、第一印象はかっこいいという印象を受けるのだが…。

「そんな怒鳴り声あげてどうしたの？」

「ん？この間みたヤンキードラマの主人公がかっこよかったの」

「…相変わらずで何より」

「あんまりほめると私調子に乗っちゃうよ？」

とまあ、こんなふうに見た目を軽く裏切る女性だ。そしてその女性…リオは自然な動作で腰のホルスターからハンドガンを引き抜いた。そしてその引き金を引き、そこから放たれた弾丸は吸い込まれるようにシズナの胴体へと…

「あの時貴様がやったこと…忘れたとは言わせないっ…」

「…恨まれるようなこと何かやった？」

その弾丸を軽く躲しながらシズナはリオに問いかける。なんで！？
なんであいさつ代わりに撃たれるの！？超展開にもほどがある！？

「ふふふ…貴様が制服着用と出世したと同時に増えた書類仕事が嫌
になったというひどすぎる理由でガーディアンズを抜けた後の事よ
…」

「いや、ガーディアンズ入隊の面接で入りたい動機を聞かれたとき
「ガンアクション映画を見てたら好きなだけ銃が撃ちたくなった。
ガーディアンズでなら好きなだけ撃てそうだから」なんて答えた人
に言われたくない。…というカリオはなんでガーディアンズなのに
私服なの？」

白のブラウスに青のスカートというラフな格好であるリオに聞く。
ガーディアンズはシズナ基準ではダサすぎるあの制服を着ないとい
けないはずなのだが。

「いやーあんなの来ても絶対に私には似合わないでしょ？というか
動きにくいし。だからゴミに出したZE！！」

「さようで」

二秒ほど前から理解不明の怒りを受けていたのに、もうすでにそんなものは影も形もない。…そしてシズナはいったい何をやったのだ
ろうとしばらくモヤモヤすることとなった。

…そして最初はポカンとしていたのにガーディアンズって言葉を聞
いただけでもものすごい睨みつけてくるのが約一名。

「何でガーディアンズがここにいるのよ」

「あれ？なんで、あたしはこんなに睨まれているのかな？」

「まあ、気にしないであげて」

というかシズナも理由は知らないのだが。

「まあいいや。ええーと。あたしはリオ。よろしくね!」

「……エミリア」

「ふむ…エミちゃんデOK?」

「なんでよ!?!」

「まあ、いいじゃん。君は?」

ユートに声をかける。

「僕はユート・ユン・ユンカースだぞ」

「よしYYYYだね!!」

「それは酷くない?」

確かに頭文字は全部Yだけど。

「それじゃあ、仮面ライダーY3でどうよ!」

「…はあ」

「溜め息なんてついてるとっ……………幸せ逃げるよ?」

「なんで溜めたの?」

その返答を聞くとリオはふうっと一息つき、意外なものを見る目でシズナを見つめた。

「本物だ…ドツペル的な感じでもない…」

「え?なに?なんで今の会話で本物かどうかを判断できたの?というかなんで疑われたの?」

そういうとリオはシズナの後ろにいるエミリアとユートにびしっと指をさす。

そのままリオは大きな声で言い放った！！

「シズナに新しい友達ができるわけがない！！」

グサツ！シズナの精神に会心の一撃！

「そこまで…そこまで言わなくなつて…」

「え、いや、だって…シズナって私と初対面の時友達いた？」

「……………知り合いはいる」

「知り合いはね。でもシズナはその知り合いのほとんどを忘れてたよね？私と一緒に仕事に出たとき気のよさそうなおっちゃんシズナに「久しぶり」って言った瞬間「誰だっけ？」とか素で言つてたよね？それと似たようなのがあと二回はあつたよね？」

グサグサツ！

めっちゃ心当たりがあつた。

というかつい最近にもそんなことがあつた気がする。

「…どうせ私はボツチですよ…」

「あははー…冗だ…んでもないからからね…実際にあつたことしか言つてないしね…」

「ひどい…そこは嘘でもフォローを…」

嘘をつくということができないリオだった。それがわかつて言っている故にシズナはリオが本気で言っていることも理解している。そう、冗談だから別に本心から言ってるわけじゃないとか、ド

Sだからとかいう理由なのではないのだ。

そしてまた急展開。

「リオさん」

後ろからまた見知らぬ女性が現れる。顔が怖い。

「あははー…どうしたのさ、ルミア。顔が怖いよ？」

「あたりまえです！仕事サボって、今までどこほつつき歩いてたんですか！？」

「だって、見張りつて暇でしょ！？突っ立ってるだけで原生生物全然来ないし！？ぜんぜん銃を撃てないじゃん！！禁断症状がでる！」

「そういう問題ではありません！ほら、早く戻りますよ！」

「いたっ！ちよっ、引っ張らないで！痛い！痛いから！あたしこれでも上司だよ！？今すぐ謝ればゆる…って、ごめんなさい！あたし調子載ってました！あたしが悪かったです！この世から争いがなくなるのもあたしのせ…」

ルミアとか呼ばれていた女の子に引っ張られて消えて行ってしまった。

「なんだったの…」

「……………どうせ私は…私は…」

シズナを精神を粉々に粉状になるまで砕いたかと思えば嵐のように去って行った。

今回エミリアが学んだことといえば「意外とシズナは撃たれ弱い」とかそんな感じだろうか。

あと、あのリオという人物の前ではあたしと居る時よりも楽しそうにしていた気がした。

少し嫉妬。

第二十話 十分ほど考えた。考え抜いた。でも…でも…俺にはダメだったんだ…

「ふふ…ははは…」

シズナが壊れた。

後ろの方でぶつぶつ言ったかと思えば時折聞こえてくる自虐的な笑い。誰かヘルプ。

「どうせ私はボッチですよ…どうせへっぽこですよ…」

《シズナさん…あの…大丈夫ですか…？》

あまり出てくることのないミカにすら心配されるほどだ。まあ、性格的には別に不自然ではないが。

と、そんな時にシズナの端末がバイブレーションを鳴らす。要するに電話が来た。それをシズナは生命力のかけらも感じさせない動きで電話に出る。

「おう、俺だ」

「…なんですか。クビですか？そうですね。こんな愛想のない社員はいりませんよね…」

「…何があつた？」

ミカに続きあのクラウドにすら心配されるほどひどい状態だ。性格的にもあまり自然とは言えない。シズナの印象的にクラウドはただの飲んだくれである。

「何でもないですよ…私なんて…どうせ…どうせ…」

「…まあいい」

全然よくなかったが。正直クラウド的にめんどくさくなってきた。

「今さっき、グーラル教団に原生生物が侵入したって報告があった」
「そうですか…」

「…んでもって、今目的地に一番近いのはお前達なわけだ。行ってくるか？」

「はあ…解りました」

シズナは多少無理にテンションを入れ替える。いつまでも落ち込んでいるわけにもいかない。そして、そこは数年間いるんなところで、どこの熱血少年漫画の主人公？ってな感じで各地でストリートファイトを繰り広げてきてはいるシズナだ。ある程度の切り替えは余裕だ。

…まあ、ある程度はだが。

そして、素直にうなづくことのない人物もちろんいる。

「ちょっと！勝手に決めないでよ！」

いまだにプレゼントを捨てられたことを怒っている様子。まあ、当たり前のような気もする。

「…あーいやなら行かなくてもいいぞ」

なにに！？クラウドさんに何があったの！？いつもエミリアに働け働け言ってるクラウドが働かなくていい！？このクラウドさんはドツペル的な何かじゃないよね！？

と疑問に思ったのはシズナだけではなかったらしく、エミリアもクラウドにその疑問をぶつける。

「え？なんでよ」

「今までよりも割と危険場所なんだよ。正直お前とユートじゃ危ない」

「な…子ども扱いしないでよ！行かないなんて言っていないでしょ！行くわよ！」

なんだかむきになってる？とか思ったが今のシズナにそれを口にする気力はない。

「はあ！？本気か？」

「当たり前でしょ！行くって言ったらいく」

「…ったく…いいか。これだけは言っとくぞ」

「何よ？また小言？それならもう、十分よ」

そんな声をクラウチは無視し、珍しく真面目な顔で言った。

「怪我せずに帰ってこい。いいな！」

「…え？」

そういうと気恥ずかしかったのかどうかは知らないが、クラウチはさっさと電話を切ってしまった。エミリアは驚きの余韻を残しながらも小さくつぶやいた。

「もしかして…心配してくれたのかな…」

「さあね…」

シズナはクラウチの心情が完璧に読めるほど大人でもなかった。

リオ&ルミアSIDE

「ふっふっふ…やっ…やっ…と撃てる…っ！」
「ハア…」

さっきからどっちが上司かわからないけど形だけは部下であるルミアがため息ばかりついていて。何が原因なんだろうね？
今いる場所はグラール教団の研究所。原生生物が侵入したらしい。ずいぶんとザルな警備だ。いやまあ、彼女もその警備の一角を担っていたのだから。

「そんなため息ばかりしてるとモテないよ？折角かわいい顔してるのにさ」

「女である以前に私はガーディアンズです」
「まじめなことだ」

女を捨てて仕事に生きるという奴だろうか？とリオは思う。ぞういえばシズナもこんな感じだったなとさっき偶然再会したことを思い

出す。

別にまじめというわけではない。というかりオはシズナに何度も書類仕事を押し付けられていた。まったく…あれを他人に押し付けるのがどれだけ大変だかシズナわかっているのだろうか？

まあ、やらせてもシズナの字は汚くて読めないし、簡単な漢字も読めないし、簡単な計算もできないし…と、そういう分野に対しては幼稚園児レベルだったのでやらせたとしても意味のないのだが。話が逸れた。シズナは別にまじめというわけでもないのだが…何か一つの事に必死で自分の事はどうでもいいといった感じだった。なかなかにおせっかいだけど。

グガアアアアアアア………

なんてことをぼーっと考えていると何やら前のほうから原生生物のものと思われるものすごい足音とが響いてくる。

その数秒後にはウバクラダの群れが視認できるようにすらなっていた。

「おお…いた…っ！」

「はあ……」

と目をキラキラさせているリオを横目にルミアはため息をつく。

「さっそくレッツゴー」

「機械を壊さないでくださいよ……」

「私にそんな器用なまねができるんですか？」

「威張らないでください！」

何でこんな人が上司なんだろうかとルミアは内心でため息をついた。そして…

「ちょ、なんでこんなに多いのよ!？」

一人の女の子の大声も聞こえた。

また戻ってきてリトルウィングの面々SIDE

こっちでも研究所で原生生物の足音が響いていて、目の前にウバクラダの群れが視認できた頃だった。

「ちょ、なんでこんなに多いのよ!？」

「ユー君。突撃しちゃだめだから」

「グエツ!？」

ウバクラダの群れを見つけたと同時に突撃していったユートの首根っこを押さえる。

それにしてもこの光景はなかなか圧巻だ。

自分より全長の大きい原生生物たちの十数匹が一丸となって突撃してくる。この光景だけでも気の弱い人間なら一目散に逃げだすのではないだろうか？最近では眉唾物とされてはいるが、武田騎馬軍団の突撃はこんな感じだったのかもしれない。

「は、早く逃げない!」

「いや…大丈夫」

「へ?」

シズナの見ているほうに意識を向けると、確かにそこにはさっきで

あつたガーディアンズのくせに私服のリオと、ガーディアンズの制服を着こなしたガーディアンズの二人がいた。

そしてリオは突進してくるウバクラダの群れの前に、遠目でもわかるほどに喜びを滲ませながら立つ。

そのままリオは慣れた動作でハンドガンを構える。そして引き金を引いた。

目標は最先頭にいるウバクラダ。

その銃弾が貫いた先は面積が広く当てやすい胴体でもない、死角を奪える目でもない、頭でもない。

小さい故に当てにくく、これといって弱点というわけでもなさそうな「足」だった。

そしてその銃弾の目的はダメージを与えることではない。

転ばせること。

その予想通り先頭のウバクラダは四本足の内の一本を潰され、バランスを崩し転倒する。その結果は。

そのころんだウバクラダに引っかかり雪崩式に転倒していく大量のウバクラダ。

それをリオは面白そうに見ながらも、素早く空いているほうの左手にもハンドガンを構え中央に突っ込んだ。

「リオ。いつきまーす！」

新しいおもちゃを買ってもらった、子供のようにどっかのニュータイプっぽく言うとそのまま群れのだ真ん中に飛び込み、もう一人のガーディアンズもそれに続いていった。

態勢を崩された状態であり、先手をとられたウバクラダ達が殲滅されるのは、時間の問題だった。

「すつきりしたあ…ああ、撃った撃ったー」

ものすごく気持ちよさそうに大量の原生生物の死骸の中に一人立つ。そこにその部屋にいる面々が近づいて行った。

「無茶なまねをしないでください…」

「いいじゃん別に。好きなだけ撃てたし、私は満足！もう帰らない？」

「だめです！」

そんなどこか板についたやり取りをし、そこでシズナの存在に気づく。

「おお！またあったね！立ち直れた？」

「…なんとか」

まだ微妙な感じだったが本人が大丈夫と言ってるので大丈夫だろう。そこらへんはリオも彼女の事は信頼していた。

「あ、一応紹介しておこうか。こっちが私の「形だけは部下」のルミア・ウェーバー」

「初めまして。ガーディアンズ総合調査部のルミア・ウェーバーです」

「…シズナ。よろしく」

リオを間にはさみ自己紹介をするものの、相変わらず他人相手には緊張するシズナは端的に返しつつ、ガーディアンズというセリフを聞いた途端に目の色を変えたエミリアの口を押える。ふごふがいつて抗議しているエミリアはとりあえず無視。

「珍しいこともあるもんだねー…それで？シズナ達は何しに来たの？」

「リオさん。一般人は非難させるべきかと思いますが。まだ子供ですし…」

「ちよつと！子供ってどういう意味よ！あんただって同い年じゃない！それに私たちだってここの実験装置を守れっていう依頼を受けてんのよ！」

シズナの手を振りほどいたエミリアVSルミア勃発。

「なんだあなた傭兵だったの？」

「何か文句ある？」

「いいえ。ただあの程度の原生生物を相手にひるんでいる人たちの実力なんてタカが知れてると思いますか？」

「何よ人を下に見て！私だってやろうと思えばやれ……」

と喧嘩が始まったのを横目に見てシズナとリオはそんなことはどうでも良さそうに雑談していた。

「そういえばなんかずいぶん簡単そうにガーディアンズの制服捨てたって言うってたけど大丈夫なの？」

「いやそれが、そのせいでしょうっちゅうライラを含めたお偉いさんたちの説教の餌食だよ……」

「そんなにいやならやめればいいのに……私みたいに」

「別にそれでもいいんだけどさーやめようとする、なんかたくさんの人がやめとけやめとけて」

「まあ、実力もあるもんね……そういえば、あの子の「ウェーバー」ってのなんか聞いたことある気がするんだけどなんだったっけ？」

「ほんと、世間知らずなところも変わらないよね……」

「有名人だったの？でも、生きるために必要な情報ってわけでもないでしょ？」

「ちよつと！シズナ！聞いているの……」

と、その和やかな雑談にエミリアが割って入ってくる。それに対してシズナはマイペースに答える。

「あ、終わった？ならさっさと行こうよ」

「あたし任務変更する！」

この子はいきなり何を言ってるのだろうか。

「……それは仕事を任された一人の人間としてどうかと思うんだけど……というかなんで？」

「こんなやつに人の命に係わる仕事のなんて任せられるわけないでしょー！」

「へえー……ここの逃げ遅れた人たちの救出作業というまったくもっ

て面白味のない仕事を受けようなんてエミちゃんは物好きだ…ちよ、痛い！ルミア痛い！髪引つ張らないで！？」

「リオさんはもっとガーディアンズとしての自覚を持ってください！」

「私の場合、自覚なんてものは即座に鼻歌交じりでそこらに捨てるよ？どぶ川に投げ入れるね」

ルミアに睨まれるリオだった。

「ほら！こんなやる気のないやつと、うるさいやつになんか任せられないでしょ！？」

「うーん…」

この「うーん」はエミリアの提案を受けれるかどうかの唸り声ではなく、どうエミリアを説得するか「うーん」だ。彼女には他人の任務に口出しするつもりは毛頭ないし、そもそも相手がリオなのでしくじるなんてことはないとはば断言できる。

と、そこでリオが声を上げた。

「あ、そうだ。私と、シズナで機械の防衛。エミちゃん、ルミア、ユー君で救助作戦というふうに分れるのはどう？」

「なんで、そんなこれなら問題ないだろうっていう顔で言えるの？」

「私も納得できませんが」

シズナとルミアの言うことももつともで、わかれる理由が見当たらない。

「だって、人命救助なんて、原生生物の相手は二の次になるから撃てなさそうだけど機器の防衛なら、襲ってくるエネミーを好きにだけ撃てる。それに、もう少しシズナとしゃべってたいです。エミち

やんだって人命救助のほうに回りたいんでしょ？戦力的にもピツタリじゃない？」

「もうちょっと本音を隠してもいいと思うけど？」

「私にそんなことができるわけじゃないじゃない。別に自分の子の性格は嫌いじゃないしで、どうよ？」

リオはルミアにそう聞くと、予想外の返事を返してきた。

「はあ…解りました。その女の子がいいのなら」

「なん…だと…え？ほんとにいいの？」

リオとしても通るとは思ってなかったらしい。

「やる気なくついてこられても迷惑です」

「…一応私のほうが上司だよね？」

ほんとに最初の自己紹介通り、形だけは部下のルミアだった。

第二十一話 最近スランプ気味であります！

結局別れることとなった。特に深い意味はない。

エミリア、ルミア、ユートが人命救助。残りの人間で機械防衛。

シズナとしては多少…いやかなり。いやものすごくエミリア達が心配だったもの、ただ救助しに行くだけだし何とかなる…はず。というのが60%。久々に会った親友といたかったというのも30%を占めている。残り10%は初対面の人間と共闘とか勘弁してほしいだった。別にルミアが嫌いと言うわけでもなくただ落ち着かないだけ。

そして二人きりとなったシズナとリオ。

「…なるほどねえ。宮本武蔵みたいに伝記書けるんじゃない？わが生涯で勝てたものはいなかったみたいな」

「いや、漢字殆どかけないから…字も汚いからたぶん自分でも読めない…」

「アホの子？」

「そこまで馬鹿じゃない！学校で習うような知識と世界情勢の知識がないだけ！」

「あつそ……あつはつは！まるでゴミのようだー」

とシズナがガーディアンズをやめた後の話を聞きながらリオは原生生物を殲滅していた。雑談しながら片手間で原生生物は虐殺されていつてる。なんか可哀そうになってくるレベルだ。片手間でたった一つしかない尊い命を奪われていく原生生物たち。原生生物保護団体が泣きそう。

戦い方と言えばシンプルであり、リオが機器の前で原生生物が近づけないように弾幕を張りつつ敵の層が大きいところにはシズナが巨大な鎌を片手に飛び込んでの虐殺劇を開くというものだ……雑

談しながら。チートすぎる気がしてきた。

「にしても…ほんと化け物だね…」

「うるさい」

小さくつぶやいたはずなのに何で聞こえるの？地獄耳か何か？」

「聞こえてるから。途中から声に出てるから」

「はいはい…」

シズナは突っ込みを入れながらも後ろで大きな爪を振り上げていた原生生物を振り向きざまに切り裂く。後ろに目でもあるのか？ありえそうで怖い。絶対人間じゃないよあれ。実は人間じゃないって言われても「あ、そうだったんだ」で納得できる自信がある。

と脳内で化け物扱いしつつも別に畏怖の対象としてみているわけでもないし、気味悪く思っているわけでもない。それどころが一番の親友と思っていた。ただ、その戦いざまを見てただ「化け物みたいに強い」と思っているだけだ。それをシズナも理解しているからこそたいして気にはしない。誰か他人が言えば別だろうけど」

「だから途中から声に出てるって…まあ…嬉しいけど…」

と多少恥ずかしそうにしながらシズナが戻ってきていた。珍しくわずかに頬を赤めているところなんかはなかなか可愛くもあつたのだが、後ろにある…うん。あまり見たいものじゃない光景がすべてを台無しにしていた。原生生物だったものがたくさんある。という遠回しな表現でお茶を濁すでしょう。

「これで機器の防衛は最後？」

「うん。おしまい。お疲れさん」お姉ちゃんが抱きしめてあげる」

ちなみにリオは一応今年で22あり、シズナは17とかそのぐらいである。

「…遠慮しておく」

「えっ……？」

「いや、そんな本気で残念そうな顔しなくても…」

「昔はよくやったのに…」

「無理やりね」

「なんか冷たくない？」

そついいながらリオは自然な動作でポンポンと頭をなで始める。

「ん……」

「こっちは抵抗しないんだね？相変わらず」

「…うるさい」

特に感情をのせずにただ思ったことをそのまま口にしたようなテンションで言うリオをスルーしてさっさと背を向ける。

「それじゃあ、次はエミリア達を追いかけようか？」

「え？ほとんど銃も撃てなさそうなところに行くわけないじゃん。私は帰る」

何をバカ言ってるの？という表情を浮かべるリオを…

「行くよ」

力ずくで引つ張る。

「あ、ちよつ…痛い！痛いから！そしてこの展開はもうマンネリ気味だから！読者も飽きるから！同じネタは三度まで！？…というかこれ何回目だっけ！？」

その声を聴きシズナはいったん足を止めて考え込む。そしてリオのほうに振り返り、少し恥ずかしそうにしながら言った。

「…それじゃあ、着いて来て欲しいからついてきて？その…一緒に居たいし…」

「おお。デレた」

「なんか真面目に言ったのが馬鹿らしく思えてくるんだけど…」

「あははーごめんごめん。ま、そこまで言われたら行かないわけにもいかないね」

心底嬉しそうな表情でリオは言った。

「なんかさ。今からとっても楽しいことが起きる気がする」
「どうしたのいきなり？」

救助者の避難場所の前のあたりでリオが立ち止りつぶやいた。

「いやだつてRPGで言えばそろそろこのダンジョンも終盤でしょ？ボス出てくる感じでしょ？中ボス出てくる感じでしょ？延々と回復魔法かけながら弱点ついてちまちま体力削つてく感じでしょ？」

「ここは現実だからさ……」

「これでテンプレ通りならエミリア達がいって「結構ヤバイでしょう」ってタイミングと見た」

「だからここは現実……」

そんなボスフラグを楽しそうと表現できるのはリオだからこそである。そして目の前の扉に近づき自動でスライドしていく扉の先には……

「っふ…これが女の勘……」

「違うと思う」

ボスとエミリア達がいた。…マジで？

アルテラツゴウグと呼ばれる早口で言うど噛みそうな名前のボスだった。え？そうでもない？そうですか、すいません。

全体的に白い甲殻に二つの首。四足歩行の龍と言ったところか。教団の実験生物であり、性格は凶暴。というかなんでこんなものを作

っているのだろうか？

「さて、シズナはあの子たちだけでどうにかなると思う？」

「…少なくともエミリアとユートにはかなりキビいと思う」

「そうなんだよねえ…ルミアもくそまじめに訓練受けてたから結構優秀ではあるんだけど…ちょっと荷が重い？」

そんな状況分析をしつつリオは何時ものようにへらへらしながら近づいていき…そこで聞いた。

「教団所有の実験生物がこんなところで暴れてるなんて…最悪」

「ちよつと、一旦逃げた方が良くない？」

「あなたは逃げれば良いじゃない！この奥に閉じ込められてる人がいるのに逃げるなんて、私にはできないわ！」

そんなエミリアとルミアの会話を聞いたリオは笑みを消して、深々とため息をついた。

「駄目だね。駄目。ええダメですとも…」

そんなことを呟きながらリオはライフルをナノトランサーから出現させる。そしてルミアの頭上スレスレに弾丸をぶつ放した……何この子怖い。もちろんルミアは驚きながら周りを見渡す。そして原因を確認。

「なっ…リオさん！なんのつもりですか！？」

「あー…それよりほれ。そこよけたほう良いんじゃない？」

「つく…」

丁度アルテラツゴウグが紫と白のプレスをはいていたので適当な感

じで忠告する。

「別に誰かを助けるのはいいけどさー…無謀な突撃とかはやめようよ。私いるんだし来るまで待つとかさー…それで死なれても後味悪いしさー…イーサンの妹が怪我したら上官の私が責任問われるしさー…」

とかぶつぶつとつぶやきながら歩み寄って行く。

「まあ、最後のはどうでもいいんだけどさ」

と、適当な感じで言っているのと裏腹にその顔だけは真剣だった。真面目に説得しようとは全く思えない。

「怪我されると私が悲しいんだけど？」

だけど、これは彼女なりの真面目な説教だった。いや、微妙に違う。ただ、自分の思っていることを素直に話しているだけ。何も飾らずに、相手の事を考えることもなく。言ったら不味そうなことだろうがなんだろうがただ、伝えたいことを口にする。だからこそ。そんな性格だからこそ。相手の心に素直に響く。

「……………」

沈黙するルミア。それをリオは一瞥するだけで改めてアルテラツゴウグに視線を向ける。

「まさか話てる間ずっと襲ってこないとは…紳士ですなー」

とすでにリオはおどけた感じでへらへらしながら言っていた。

「それにしてもめんどくさい救助だけと思ってたら…ラッキー。好きだけ打てそう」

「戦闘狂だよね…相変わらずの」

「私は戦うのじゃなくて銃を撃つのに快楽を覚えるだけですーそれにシズナだってそうじゃないの？」

「別に戦闘が好きってわけでもないよ？どちらかと言えば嫌いだし」
「そういえばそうだった」

そんな軽口をたたきあいながら、リオはアルテラツゴウグへと銃身に向けた。

第二十一話 最近スランプ気味であります！（後書き）

もしよろしければ感想プリーズ！

第二十二話 遅れてすみませんでしたあああああ……いや、待ってる人な

感想でも書きましたが遅れた理由はちゃんとあるんですよ？
主にゲームですが。

第二十二話 遅れてすみませんでしたあああああ……いや、待ってる人な

現在地。教団施設内。目の前にはアルテラツゴウグという早口で言うとかうみそうな……あ、いやこのネタもうやったか。

今日の前にはアルテラツゴウグという長ったらしい名前を持つ、二つの首を持つ龍のような原生生物が横たわっていた。

いやーアルテラツゴウグとの戦闘は激闘だった。うん。あのブレス攻撃なんかすれすれだったし。でも最後のエミリアとルミアの行きびつたりな連係はすごかったね。うんうん。

……なんで戦闘飛ばしたかって？だって特に作戦らしい作戦もなく一人一人がちまちま攻撃してたらなんかあっけなく倒れたんだもの。何を書けと？

「これもダメか……」

どこかがっかりしたような表情でシズナは武器をしまう。

「ダメって……ぜえーはあ……何が……」

かなりグロッキー気味のエミリアが目ざとく、シズナのつぶやきを耳にする。

「んー何でもないよ」

「……あっそう」

追求する体力もないのかエミリアはそのまま会話をつづけることなく座り込む。

「エミリア、救助はいいの？ガーディアンズなんか頼りにならない

んじゃなかったっけ？」

「あー…そういえばそうだったかも…なんかもうどうでもいい…」

「はあ…」

「いいですよ。後は私がやっておきますので」

「あっそう？それじゃあ、後はルミアちゃんに任せた！」

結構きつい戦闘を繰り広げたというのに相変わらずのハイテンションでいるリオに、疲れてはいるが意地で、平静に振舞おうとしているルミア。

「リオさん。あなたもです」

「ええー…あ、ちょ！やめて！髪を引つ張ろうとしないで！行く！行くから！」

何回も引つ張られてるせいで本能が危機を察知したのか。ルミアの雰囲気が変わった途端に、真面目そうな顔を作ろうとしている顔を浮かべる。分かりにくい表現！

それを見ながらルミアは何度目になるのかわからないため息をつき、エミリアに向き直る。

「…一応。お礼は言っておきます」

「一応は余計よ！まったく…たまには素直に感謝しなさいよね」

「駄目だよエミリアちゃん。ルミアはツンデレなんだから。ツンデレからツンを取ったらデレだけだよ？私個人としてはやっぱりただのデレなど炭酸が抜けたコーラと同義だと思…ごめんなさい」

ルミアの冷たい視線に気づき、口をつぐむ

「それでは、これで」

「んじゃ、シズナにエミリアちゃんにユート君。お疲れさん」

「ん、バイバイ」

「今度、遊びに行くねー」

ヒラヒラと手を振りながら去って行った。

「ガーディアンズ。どうだった？」

そう、エミリアに聞くとそっぽを向きながら答えた

「…ふん、悪くはないと思うわよ」

「素直じゃないね」

と、答えたところでふと気づいた。

——ユートはどこに行った？

少し離れたところで、忘れ去られていることにいじけているユートがいた。

現在地。リトルウィング社長室前。

今エミリアはその社長室前でうーとかあーとか言っただけだ。

「行かないの？」

「絶対、叱られるじゃん…しかもウルスラさんいなかったし、おっさんとのWでしょ？ユートはさっさと行っちゃおうし…」

ということらしかった。まあ、ついさっきクラウドから連絡来たのだ。普通に呼び出ただけだとシズナは思うのだがエミリア的には「ちよつと事務所まで面かせや」的な感じで聞こえたらしい。

「なにしたっけ…あ、もしかしてクラウドが風呂上りに食べようとしたアイスを食べちゃったとか言うテンプレ展開？」

「違うわよ！わかってて言ってるでしょ！勝手に仕事内容変えちゃったことよ！」

「ああ…そのこと」

何を気にしているかは分かったのだが、そんなことないと思うというのがシズナの心情だった。やっぱこの子めんどくさい。

「いいから、入った入った、ね」

「え、あ、ちよつと!？」

無理やり背中を押す。こうでもしないといつまでもこうしてそっだ。

ガンッ！

衝突音。

やべ…。ちょっと強く押し過ぎたのか、自動ドアが開ききる前にエミリアは前に出てしまい、ドアとフレンチキスを果たした。デコが赤くなつて、少し涙目になつてゐる。

「うう…」

「…なんか…ごめんなさい」

なんかいたたまれない。悪気があつたわけじゃないのが余計にいたたまれない。

「それじゃあ…」

「うん…」

そしてそのままなし崩し的に、社長室へとテンションがマリアナ海溝びつくりの低さで…。いや、もともとエミリアは低かつたのだが…。社長室に入室。

そしてパンパンとクラッカーが鳴り響いた。

「誕生日おめでとネー」

「おめでと。エミリア」

「エミリア！ごちそうがいつぱいだぞ！」

同時にエミリアの顔に変化が訪れ、まずは呆然となる。

「え…どういふ…シズナ！？どういふこと！」

「見ての通りだと思うよ。おめでとう。エミリア」

飾り付けてある『誕生日おめでとう！』という手作り感満載の飾りつけを指さしながら、今度は力加減を間違えないようにして背中を押す。この雰囲気ですつきみたいにドアとのフレンチキスとなったらシャレにならない。そして、エミリアがクラウチらと向かい合う形になる。

「えと…おっさん？どうして？怒られないの？」

「あ？ちゃんと依頼をこなした後にやったのなら問題ないだろうが」

ということらしかった。で、クラウチ曰く、ガーディアンズから直々にお礼が来たと告げられ、エミリアの表情が徐々に喜びで染まっていく。

「シズナはいかないノ？」

「チエルシーさん…？」

そんなエミリアの様子をぼーっと見て、そろそろもどろっかな…などと思っているといつの間にかチエルシーが横に立っていた…いつの間に？まあ、どうでもいいか。それにちょうどいい。

そんな結論に至りシズナは一つの可愛らしい、箱でデコレーションされた小さな箱をチエルシーに差し出す。

「…これ、エミリアに渡しておいてください」
「ン？」

チエルシーはそれを受け取ることはせずにシズナに問う。

「自分で行かないノ？」

「…はい、お願いします」

珍しく語尾を濁し、歯切れ悪くシズナが言う。そしてそれを押し付けるかのようにチエルシーに渡そうとする。それを見てン…とチエルシーが考え込む。

「シズナが自分で行った方が喜ぶと思うヨー？」

「……………」

そういつてもシズナは俯きながら、ただ箱をグイッとチエルシーに突きつけるだけだった。そこでチエルシーは気づいた。…シズナの微妙に顔が赤いということに。

そして、天啓のようにひらめいた。

「渡すのが気恥ずかしいトカ？」

「な、なんのことやら…」

ブイツと顔を背けながらも、誰がどう聞いてもテンパリまくっている声を出す。それをみてチエルシーはにやりといたずらっ子のような笑みを浮かべ…

「エミリアー！シズナが渡すものがあるってヨー」

「え、ちょ、チエルシーさん！？」

なんてことを言うんだ！という視線でチエルシーを見る。

「どうしたのー！」

そんなシズナの事の心中など知る由もないエミリアは、天井知らずのテンションを誇りながらやってくる。そのエミリアの耳には白いイヤリングがつけられていた。プレゼントだろうか？

「シズナ、どうしたの？」

「え、あ…その…えっと…」

こんな事になったチエルシーをにらむ。が、相変わらずの素敵な営業スマイルでひらりと躲してきた。この恨みハラサイデカ…

とはいえここまで来てしまっではしょうがない。大丈夫だ…落ち着け…うん。これを渡すだけ…これをエミリアに差し出す。エミリアがそれを受け取る。うん、それだけ。それだけなんだ…そのまま数秒間ウジウジ迷っていたものの、相変わらずニコニコとシズナを見守るエミリアを見てから、二度ほど深呼吸して覚悟を決める。ええいままよ！

「これ、あげる」

「え、いいの!？」

「ん。どうぞ」

「えへへ…ありがと！さっそくあげていい？」

「うん」

つく…何でこれだけなのにこんなに気恥ずかしいんだ…なんだかものすごく恥ずかしい…幼少期にロイドにあげたときは「ん、ありがとう」とかマンガ読みながら横目でちらりと言ってすぐさま漫画に視線戻してゲラゲラ笑ってたからなあ…何でこんな純粋に喜ぶんだこの子は。何でこんな無邪気で満面の笑みを浮かべられるんだこの子は。

そんなエミリアが開けた箱の中には一体猫のぬいぐるみが入っていた。

それを見て、エミリアはさらに笑顔を深めて、言った。

「ありがとう！シズナ！」

それに対してシズナは自分でもびっくりするぐらい自然に笑顔で返せた。

第二十三話 前回よりはマシ！だと思っ話。

「…お前って…料理できたんだな…」

彼が畳や障子などがおいてあるザ・和風といえる部屋に戻ってきての第一声がこれだった。彼にとって見慣れた部屋のテーブルの上に一つの皿がおかれており、その器の上にはチャーハンが盛られていた。

そして部屋で待っていたらしい少女…シズナはこの部屋の主にコクンと頷いて答える。

「結構頑張った」

「あっそう…んじゃあ、早速、と言いたところだが…お前は箸を用意していないという致命的なミスを犯している」

「…忘れてた」

顔を赤くしながらトコトコと部屋を飛び出していき、またすぐに箸を片手に戻ってくる。

「一本だけとかいうオチはやめてくれよ？」

「…大丈夫。厨房の人が苦笑いしながらもう一本もくれた」

やっぱ忘れてるんじゃねえか。と、思いながらも箸を受け取る。

「そんじゃ…いただきます」

パクリと一口。…そして沈黙。固まる。

「…どう？」

不安そうに、でもおいしいって言ってほしい。そんな表情で、上目使い気味に聞いてくる。

正直に言えば、おいしいとは言えない。もし、まずいと言ったらどうなるだろうか？きつと悲しむだろう。辛いだろう。落ち込むだろう…

真実は何時も過酷なのだ。だから…

だから彼はこういった。

「…まずい」

「え…？」

はつきりと言ってやった。だってこのチャーハンなんか…

「味見したか？」

「ううん」

やたら自信満々で首を横に振りやがった。

「んじゃ、食ってみろ」

「…？」

彼は箸を不思議そうにしているシズナに箸を渡し、シズナはパクリと一口。

「…あれ、甘い？」

「なんでチャーハンなのに甘いんだよ？たぶんこれ…」

「砂糖と塩を間違えた…？」

「どんだけベタな間違い！？」

彼はシズナにそう言った。シズナはプイッとワザとらしく視線をそらし、言い訳を始める。

「まだ、初心者だし…」

「いや、初心者だろうがなんだろうかりアルで塩と砂糖間違えたやつとか初めて見たぞ？ベタすぎてベタベタしてて気持ち悪いわ」

自分のことながら何を言っているのかわからなくなってきた。それでも彼女の言い訳は続く。

「えーと…ほら。疲れた時は甘いものだし…」

「だったら何でチャーハンのチョコイスだよ」

「実は甘いチャーハンっていう新食感を試してみたから…」

「さっき自分で甘いことに驚いてたよな？」

それを最後に言い訳の種も尽きたらしく、今度は恨みがましく彼を見つめる。

「うー…そこは嘘でもおいしいっていうとこじゃないの…？」

「正直なんだよ俺は」

そついいながら彼は次々とそのまずいチャーハンを口に運んでいく。

「まずいなら食べなくてもいいよ…」

「確かにまずいな」

「うう…」

orz...と言う感じで落ち込むシズナを横目に嫌そうな顔もせず
に...むしろ嬉しそうに彼はチャーハンを口に運んでいく。

「シズナ。俺さ...なんかよくアニメとかでその気持ちが嬉しいとか
って聞くんだけだよ...」

「？」

「あれって本当だったんだな。このチャーハンもの凄まじくまずい
が...」

「そう何度も連呼しないで!？」

「最後まで聞け。とにかく。俺は今、シズナが料理を作ってくれて
嬉しい。ありがとうな」

そういつて彼...ロイドはにっと笑った。

「...夢か...」

夢で昔の事を思い出すとかどっただけベタなの...とか思いつつ、ベッ
ドから体を起こす。

「…お嬢様が起こさなくても勝手に起きた…だと…」
「うるさい」

そついつてドラゴン型の青いパーツで作られたPMの頭をド突く。

「いや、でも普段は起こさない限り確実に午前中はずっと寝てるじゃないですか…」

「布団が気持ちよすぎるのが悪い」

サラリと物に責任転嫁をしつつ、何しよつかない…などとぼーっと考え始める。そこで、PMのジェイがキッチンに向かうのが見えた。

「ジェイ。今日は自炊するからいい。休んでて」

「…この朝食を作る仕事まで取られたら何もすることがないので…」

そうなの？と思いながら思いつくものを上げていく。

「掃除は？」

「ものがほとんどないから掃除機を一通りかけるだけで終わります」
「洗濯」

「お嬢様は今着てるのを合わせて三着しか持ってないじゃないですか…女の子としてどうかと思いますよ？」

「そんな余裕はなかったし」

きっぱりとそう言い切り、自らがサラリとキッチンへと立つ。

「って、だからやる事がなくなるからやめてください！…！」

「おーっす！おはよう！今日も一日頑張ろう！」
「おはよ」

ハイテンション な エミリア が あらわれた。

↓切る

テクニック
銃

「何でそんな物騒な選択肢しかないのよ！？」
「何となく。深い意味はない」

心底どうでも良い無駄な会話である。
そんなチャイムも鳴らさずに無断入室してきたエミリアをとがめることもせずに、シズナは作り上げたチャーハンを皿の上に乗つける。ちなみにジェイは端っこの方でいじけている。

「え、あれ？シズナって料理できたの？」
「ほどほどに」
「へえ…ねえ、食べてみてもいい？」
「んー…まいっか。どうぞ」

そう言いながらシズナはチャーハンの一口分をスプーンですくい、エミリアに差し出す。伝説の「はい、あーん」ではあるがあくまで同性であり、両者ともに特殊な趣味を持っているわけでもない。

それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。エミリアはそう思ったものの、対するシズナの方があまりにも平然としており、恥ずかしがっている自分が馬鹿のように思えてくる。

なのでエミリアは少しの逡巡を振り切り、そのチャーハンを口に入れ、咀嚼。そして飲み込む。一言。

「…まずくはないけど…おいしくもない？」

なんとも微妙な味だった。それを見てやっぱりか…と言うふうのため息をつく。

「これでもマシになったほうなんだけど…」

「マジで？」

「うん。でも今はちゃんとタワシとウニの区別もつくから」

「今はって言った…？昔は…？」

「…うつさい」

自分でも気づかないうちに自らの黒歴史を暴露してしまった…ちよつと泣きたい…なんか話題をそらせるものは…あたりを見渡し、この部屋に来てから一度もつけたことのないテレビ電源をONにする。

そしてわずかな時間差があり、テレビの画面に一人のニュースキヤスターが写る。

「はぁーい。グラールチャンネル5ニュース、ニュースキヤスターの、ハルです！」

あの服装恥ずかしくないのかな…お腹でてるし、しかもスカート短い…寒くないのか…それがシズナのこのハルと言う名のニュースキヤスターを見ての第一印象だった。

「そういえば…エミリアもスカート短いよね？恥ずかしくないの？少し運動しただけでパンツ見えると思うんだけど」

「ファッションだからいいの！！」

「あっそう」

何故か少し恥ずかしそうにしているエミリアから視線をそらし、自作のチャーハンをいただきますと言ってからそれを口に頬張る。もぐもぐと数回咀嚼する。

…うん。なんて言うか…微妙だ。美味しいともいえないし、不味いともいえない。本当に微妙としか言えない味なのだ。

そんなチャーハンを口に運びながら、なんとなくテレビに目を向ける。

『グーグル各地で発生している謎の集団失踪。その搜索依頼が後を絶ちません』

そういつて何人かの行方不明になっているのであろう人間の顔写真がピックアップされる。それを見た限りでは性別や種族。どちらにも特に共通点は見当たらない。

特に知ってる顔はない…よね…？…自信ないや…アハハハ…。

『先日の文化保護地区の襲撃において失踪者を統率する人物が目撃されており…』

たぶん文化保護地区というのはカーシュ族の村の事で、統率している人間というのはあの黒服だろう。あの黒服はおそらく数いる傭兵達の中にあてはめてもトップレベルの実力だと思われる。シズナも彼に単独で勝てそうな相手。そう言われると一人ぐらいしか思いつかない。

少なくとも自分とは同等かそれ以上……そんな事実には内心で少しだけ笑う。

「……です。今、警察が重要参考人としてその足取りを調査中です」

と締めくくり、ニュース画面が切り替わる。そこには一人の老人
 と言つて差し支えない人物が写る。

「では、次のニュースです。先日ニューデイズでの武器開発を主とした大手企業「龍楼閣」の総取締役である水無月 カンラさんが先日死去しました。」

「え？」

「シズナ、どうしたの？」

突然固まったりリアは何でもない……と返しながらテレビの電源を切る。

「傭兵の間じゃ結構有名な人なの。ちよつと驚いた」

「
い
|
ん
:
」

エミリアは特に不審に思うこともなく納得する。噓は言っていない。

P
r
r
r
r
r
r
r
!
!

そんな時、エミリアの腰あたりから電子音が鳴り響く。

「あ、通信だ」

エミリアは慣れた様子で迷わずに一回だけボタンを押す。この間

二秒。

…ちなみにシズナの場合はまず、どのボタンを押せばいいのかで悩む。そして五秒間程悩んだ末にボタンを押す。そしてそれが正解であればいいものの60%ぐらいの確率で操作をミスリ、着信を無自覚で拒否る。そしてミスった場合は何とか掛け直そうとする。しかし、それが成功するのに約一分ほどかかるという、最悪通信に出るだけで一分五秒かかるという恐い事になっている。

と、そんなシズナの恐ろしいほどの機械音痴話はともかく。エミリアが通信に出る。相手はクラウチらしい。

『おい、シズナを呼びに行くだけで何でこんなに時間がかかってやる!!』

「……あ」

『おい。今の「…あ」ってなんだ』

「えーと…ちょ、ちょっと微妙な味のチャーハンのせいで忘れてたー…なーんて…」

『…さつさと連れてこい。いいな』

「…はい」

ちよつと意気消沈しつつ通信が途切れた。そして、エミリアがシズナに視線を向ける。先に口を開いたのはシズナだった。

「呼びに来たって…集合時間時間まだだね?」

「うん、そうなんだけど、おっさんが大事な話があるって」

「ふーん…ちよつと待って」

そついうや否や、チャーハンを急いで平らげ始めるシズナだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963t/>

優しい少女と小さな翼

2011年12月19日10時49分発行